

アンドレ・ブルトンの 「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

加藤彰彦

(平成16年9月30日 提出)

アンドレ・ブルトンによって書かれたシュルレアリスムに関する4つの宣言文は『シュルレアリスム宣言集』と題され一冊にまとめられているが、書かれた時期や内容も異なる宣言文をただ単に集めたものとしてではなく、全体で一つのまとまりを持ったものとして体系的に読むことができるのではないかというのが本論考の出発点である。

読解の手掛かりはキルケゴールの実存の三段階と呼ばれるものであり、ブルトンの宣言文を、それぞれ美的段階、倫理的段階、そして宗教的段階と対応させて、各宣言文における弁証法の実存的存在を指摘するとともに、全宣言文の弁証法的読解を試みた。

ただし、キルケゴールはあくまで弁証法的展開の道筋を設定するに留まり、弁証法という観点から、内容的にはクロード・レヴィ=ストロース、ヘーゲル=コジェーヴ、ヘーゲル学者であったフェルディナン・アルキエらに多くを負っている。

そしてこの弁証法的読解によって、ブルトンの求めた精神的自由が、全ての存在の基盤であるこの現実においていかに達成されるかが明らかとなる。

キーワード：シュルレアリスム宣言集、弁証法、実存の美的段階、実存の倫理的段階、実存の宗教的段階

序章

アンドレ・ブルトンの著作については現在プレイアード版が刊行されており、既に三巻が上梓されている。またその編集方法も、いわゆるジャンル別によるものではなく、発表された年代順という形をとっている。例えば本論考において考察の対象とする「シュルレアリスム宣言集」についても、『シュルレアリスム宣言』(以下適宜『宣言』と略す)と『シュルレアリスム第二宣言』(以下適宜『第二宣言』と略す)がプレイアード版の第一巻に収録されていて、『シュルレアリスム第三宣言への序論が否か』(以下適宜『第三宣言』と略す)がプレイアード版の第三巻に収録されてい

る。そして「シュルレアリスム第四宣言」とも言うべき『喫水部におけるシュルレアリスムについて(生命部分にあるシュルレアリスムについて)』(以下適宜『喫水部』と略す)は1953年という年代もありまだプレイアード版に収録されるに至っていない。このプレイアード版とは別に、ブルトンは1965年に、自ら著したこれらの宣言集を中心にまとめ、ジャン=ジャック・ボヴェール書店から『シュルレアリスム宣言集』を刊行している。『宣言』が1924年、『第二宣言』が1930年、『第三宣言』が1942年そして『喫水部』が1953年というように、ほぼ30年間にわたるシュルレアリスムについての理論が概観できるとともに、その理論

加藤 彰彦

的変更についても垣間見ることができるわけである。尚本論考においては、ジャン=ジャック・ポヴェール書店から1972年に刊行された『シュルレアリスム宣言集 完全版』を考察の対象とし、引用箇所の提示にあたっては、このジャン=ジャック・ポヴェール版とプレイード版、更にはジャン=ジャック・ポヴェール版が現在入手しにくい経緯もあり、必要な部分は収録されていて入手しやすい普及版も併記することとしたい。また、このジャン=ジャック・ポヴェール版の構成について、正確を期するためにここで記しておくこととする。まず、pp.7-11において『宣言再版のための序文』、p.12は空白の頁で、pp.13-55が『シュルレアリスム宣言』、p.56は空白の頁で、pp.57-120が『宣言』において明らかにされた自動記述による『溶ける魚』で黄色の紙が使用されている。pp.121-125が『第二宣言再版のための緒言』、p.126は空白の頁で、pp.127-195が『シュルレアリスム第二宣言』、p.196は空白の頁で、pp.197-204が『女見者への手紙』となっていて緑色のインクが使用されている。pp.205-294が『シュルレアリスムの政治的位置』、pp.295-308が『シュルレアリスム第三宣言への序論か否か』、pp.309-317が『喫水部におけるシュルレアリスムについて』となっている。ここで頁構成を記した最大の理由は、初版と再版については記述内容において若干の違いが見られ、また再版に付された序文においても大幅な意見修正が行なわれているためであり、そしてそれは本論考の論理展開において大きく影響を与えるものではないにしても、印象の違いといったものは指摘し得るからである。尚この点については、本論考の第二部において触れることになるだろう。次に『溶ける魚』と『女見者への手紙』については、いわゆる理論を提示したものではないということから、本論考の対象外としている。そして『シュルレアリスムの政治的位置』も本論考

の対象外としている。このことについて、本論考の立場は文学・芸術を対象としたその哲学的分析であり、政治がシュルレアリスムの文脈において重要であるとは認めながらも、それを対象とすることによって本来の目的から外れ、論点が曖昧になっていくことを危惧し対象外としている。仮に『シュルレアリスムの政治的位置』をも本論考の対象とするならば、トロツキーとの関わりからロシア革命史、ロシア政治史にまで調査研究の対象を広げなければならず、それは本論考の目的から大きく逸脱する結果になることは明らかだろう。従って以上の理由からジャン=ジャック・ポヴェール版の『シュルレアリスム宣言集』を対象としながらも、論考の対象としているのは、シュルレアリスム宣言として捉え得るものに限るとしたわけである。このような立場に立った上で各宣言文を概観していくならば、まず『宣言』は代表的著作であり、「シュルレアリスム宣言」はこの『宣言』のみで充分であると言い切ることさえ、それ程間違ったことではないであろうという印象がある。この『宣言』においてはシュルレアリスムの定義が示されているし、超現実の概念も定義らしきものとともに提示されている。またシュルレアリスムのイメージをいかにして生み出していくかという詩論も示されていて、これ程のものは他の宣言集には見当たらない。また今指摘したものに留まらず、ブルトンの提示した概念や理論は『宣言』の中の随所に存在し、簡単には要約し切れない程の豊富さを備えている。次に『第二宣言』は量的には全宣言集の中で最も長く、また一読してわかることは、論調がいささか政治的であり、そのためか論争的な印象を与える。これは第二部において論ずることにもなるが、シュルレアリスムそのものについての視点の変化といったものも感じられ、単に『宣言』が洗練され内容がより専門的になったというのではなく、明らかな立場の変

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

化というものがある。それはいささか現実的なものであり、従ってこの『第二宣言』刊行後の時間の流れとともに、その立場の変化が更に変化することとなり、再版に付されることになる序文として示されることになったと解される。更に『第三宣言』に至っては、その頁数の少なさを理論書らしからぬ文章も挿入され、『宣言』から『第二宣言』への移行に際して見られた変化とは明らかに異なる変化が見受けられる。言わば宣言文らしからぬ静かな調子であり、また『宣言』や『第二宣言』には見られなかった神秘主義的傾向が垣間見られるのが注目すべき点となっている。そして最後に『喫水部』であるが、大掛かりではないが、シュルレアリスムについての仕切り直しといったものが見受けられ、内的独白といった手法を駆使したジェイムス・ジョイスへの批判を通してシュルレアリスムの独自性を明らかにしている。また『第三宣言』の流れを引き継ぐものとして、グノーシス主義への関心を示している。以上のように「シュルレアリスム宣言集」を一通り見ることによって明らかになってくることは、シュルレアリスムの概念として示されているものは、ほぼ全てが『宣言』において提示されるとともに、説明し尽くされた形になっていて、我々がシュルレアリスムについて考察するためには、まずはこの『宣言』に依拠しなければならないということであるが、それは前提として受け入れつつ、『宣言』以後の「シュルレアリスム宣言集」において見られる変化をどう捉えるか、またこの『宣言』を含めた「シュルレアリスム宣言集」を全体として見た場合どのように捉えることができるかという問題の存在である。一読しただけでわかる「宣言集」の表面上の変化とともに、それをあくまで表面上の変化として留めておき、シュルレアリスムそれ自体は基本的には何ら変わっていないとするならば、その整合性をどのようにして成立させるかと

いう問題があるわけであり、またシュルレアリスムも何らかの変化を蒙っているとすれば、それはいかなるもので、どのような形で「宣言集」において示されているかを明らかにしなければならないという問題がある。我々はシュルレアリスムについてのこれまでの研究を通してフェルディナン・アルキエが『シュルレアリスムの哲学』において「従って、彼に限定することなしに、シュルレアリスム運動において、首領であるに留まらず、知的かつ思慮深い良心であったアンドレ・ブルトンにかなり特別な注意を私が払ったことは、何ら驚くことではないということだ。(中略)私は、シュルレアリスムがアンドレ・ブルトン一人から生まれたのではないということ、そして、彼がシュルレアリスムの真実を創造したり定義したりするのではなく、むしろそれを表現しそれに忠実であると主張していることを忘れてはいけない。しかし、この真実がその最大の明晰さに到達するのは、彼の作品においてなのである。/それに、ブルトンによって表現された概念の総体とシュルレアリスムとを区別したとすると、シュルレアリスムの定義そのものが困難になってしまうだろう。」(PS p.8)と書いているように、ブルトンの思想全体をシュルレアリスムのそれとして捉えることを原則かつ前提とする立場に立ち、またこのような立場をとることによって何らかの矛盾に直面しシュルレアリスムの思想が瓦解してしまうという事態に遭遇した経験を持たない以上、「宣言集」に見られる表面上の変化を通してそこにシュルレアリスムにおける一貫性を見て取るというのが我々の立場である。そしてそのような形での「シュルレアリスム宣言集」の読解となったのが、『宣言』の文字通り最後に書かれた次の文章である。「生きるとか生きるのをやめるとかというのは想像上の解決なのである。existenceは他の所にある。」(MSJ p.55)(MSG p.64)(PI p.346)

加藤 彰彦

このexistenceをどのように解するかによって、意味合いは異なってくる。existenceを存在と訳せば、想像の世界が大事なのであって、実際に我々が身を置いている現実における存在、つまり即自存在は言わば取るに足りないものであるということになる。これとは別に、existenceを実存と訳せば、想像の世界こそ大事なのであって、我々が問題にしている実存はこの現実ではなく、別の所にあるのだと解することができるわけである。いずれにしても想像の世界が大事であることに変わりはないのであるが、前者がいささか現実逃避の印象を与えるとすれば、後者は何か積極的な生き方の問題として捉えることができるだろう。アルキエはまさにこの後者の考え方を示している。『シュルレアリスムの哲学』において次のように書いている。「ブルトンが自らに提示している目標が、当時 真の生 に到達することであるのを想起しながら、我々はそれを 生死に関わる と呼ぶことで満足するだろう。しかしながら生という言葉が、生物学がそれに与える意味ではなくて、実存という哲学的意味であることを思い起こそう。生きるということは必ずしも実存することではないのだ。ブルトンは最初の『宣言』の最後でこうは書いていないだろうか。生きるとか生きるのをやめるとかというのは想像上の解決なのである。実存は他の所にある。」(PS pp. 12-13)

ここにおいて問題になってくるのは、existenceの訳語の問題だけではなく、シュルレアリスムの在り方として捉えられる問題ということになる。言い方を変えるなら、シュルレアリスムは実存主義に通底するものがあるのではないかということである。この点について、アルキエはまさに「その雰囲気は異なっていて、倫理的もしくは宗教的というよりも美的であるけれども、シュルレアリスムの体験はキルケゴールのそれと何らかの類似

がある。」(PS p.78)と書いている。

しかしだからといって我々はこちらにおいてシュルレアリスムとキルケゴールの共通性を探究したいわけではないのだ。そもそもブルトンとキルケゴールが同じであるはずがないのだ。それにも拘わらず、我々がアルキエの指摘するようにキルケゴールを連想し、シュルレアリスム理解のための何らかの手掛かりをそこに見出そうとしたのは、生の在り方、実存の問題が指定されたからに他ならない。そしてブルトンの「シュルレアリスム宣言集」を前にしてその変遷を辿る時、一つの手掛かりを提供するように思われたのが、キルケゴールの「実存の三段階」である。この段階教説については定説がないとされているが、トムティーの『キルケゴールの宗教哲学』に示されているキルケゴールによる図式とは次のようなものである。「三つの実存領域が存在する。すなわち、美的・倫理的・宗教的実存領域である。形而上学的なものとは抽象であり、形而上学的に実存する人間はいない。形而上学的なもの、すなわち存在論はあるが、実存しない。なぜなら、それが実存するのであれば、それは美的なものの中か、倫理的なものの中か、宗教的なものの中にあり、それがあれば、それは美的なもの、倫理的なもの、宗教的なものの抽象ないしはそれらに先行するものであるからである。倫理的領域は単に移行的な領域であるにすぎない。それゆえにその最高の表現は消極的な行動としての悔いである。美的領域は直接性の領域であり、倫理的領域は要求の領域であり、宗教的領域は実現の領域である。」(キ学 pp.143-144)

この実存の三段階については、パスカル、アウグスティヌス、プラトンらの影響を指摘する研究が存在するのであるが、我々が特に注目したいのは、キルケゴール自身強く否定したと言われるヘーゲル哲学との関連である。正・反・合という形

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

で前段階における矛盾を発展的に解消していくヘーゲルの弁証法に対して、キルケゴールは実存の三段階というまさに実存の弁証法を提示したのではないかというのが通説ともなっている。もちろんアルキエも指摘するように、「キルケゴールはその一部分その一契機であることを拒みながら、体系に対する反抗によって主観性を発見した」(PS p.78) わけであるから、キルケゴールの思想を体系として捉えシュルレアリスムに適用することは不可能であるが、キルケゴールと同様体系を嫌ったブルトンとの共通性は見て取れるであろう。そしてこの出発点を確認した上で我々が想定しているのは、ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」がキルケゴールの実存の三段階とあたかも対応するかの如く段階を踏んでいるのではないかという一種の見取り図である。その大まかな見取り図を図式化するなら、ブルトンの『宣言』はキルケゴールの実存の三段階のうちの美的段階に相当するのではないかと、次に『第二宣言』は倫理的段階、そして最後に『第三宣言』と『喫水部』は宗教的段階にそれぞれ相当するのではないかというわけである。もちろん既に明らかにしたように、本論考においてシュルレアリスムとキルケゴールの共通性なり、影響関係の有無を探究したいわけでもなければ、指摘したいわけでもない。我々が検討していきたいのは、「シュルレアリスム宣言集」がブルトン一人によって30年間にわたって書かれた4つの宣言文の総体であるということだけではなく、一読してわかるように表面的なものにすぎないかもしれないが、宣言集においてそれぞれの宣言に大きな違いがあること、そしてそれらと同じ宣言文であるからということだけで一括りにしてしまうのではなく、何らかの関連性を持った有機的総合体として見ていく必要があるのではないかと、そしてその際にキルケゴールの実存の三段階つまり実存の弁証法が宣言文の捉え方

に一つの示唆を与えてくれるのではないかということである。従ってキルケゴールから出発した結果、キルケゴールとは何の関係もない地点に辿り着いてしまったということは当然予想されることであり、我々の見取り図の中にはそれも含められている。むしろ我々が注目したいのは、弁証法という考え方であって、この点についてはアルキエが『シュルレアリスムの哲学』において次のように説明している。「解決は、デカルトにとってそしてカントにとって、従って二元論なのである。しかしブルトンは、二元論を拒否している、彼が渴望している論理的ではないこの存在を世界の外で探すことはできないのだ。彼はこの世界でそれを発見しなければならず、そのことは認識し得る所与にその堅牢性や構造を保持することを彼に禁じるわけである。彼が超現実の魔術を現出せしめなければならないのは、認識し得るものあるいは所与のまさに内部になのである。古典的な形而上学者たちにおいて、二面の区別によって解決する難しさは、ここでは今後世界の唯一で水平のような秩序の中での争いとなり、そして対立と弁証法的解決というヘーゲルの主題がこの点においてシュルレアリスムをそそのかすことができた理由を理解するわけである。」(PS p.77)

つまり我々は、「シュルレアリスム宣言集」を弁証法的に読解するという企図の中にいるわけである。しかしだからといって、いわゆる正・反・合として捉えられるヘーゲルの弁証法の枠の中に「シュルレアリスム宣言集」を組み込んでしまおうとする意図は我々にはない。我々にとって最大の目的は、何故ブルトンによって4つの宣言文が書かれなければならなかったのかを明らかにし、またその宣言文はただ単にその時代時代によって書かれたものにすぎないのではなく、相互に関連し、かつ全体として捉えるならば、ある思想的方向を提示し、それぞれの宣言文それ自体には書か

加藤 彰彦

れていない思想をも読み取ることにある。弁証法はそのための手段であり、ヘーゲルに留まることなく、「料理の三角形」によって矛盾解消の道を開いたクロード・レヴィ＝ストロース、形而上学的二律背反を無効なものとしたジャック・デリダそして主体と客体という相克状態からの脱却を目指すことによって道徳論を提示しようとしたジャン＝ポール・サルトルなどを援用することになるだろう。全体の構成としては、キルケゴールの実存の三段階を視座に据え、「シュルレアリスム宣言集」を解説するとともに、宣言文内部においてもまた宣言文全体としても弁証法的読解が可能であることを明らかにしていきたい。

第一部 『宣言』と実存の美的段階

第一章 実存の美的段階

キルケゴールによる用法は多様性に富んでいて美的段階として定義付けることは難しいが、様々な記述を要約するならば、欲望の発揮とその充足である。自らの欲望の存在に目覚め、かつその対象を見定めることから始まる。もっともその対象において高い次元の目標を掲げることはせず、ただひたすら欲望の充足に努めるわけであるから、精神性というものあまり問題にならない。ここで問題になるのは、欲望の充足が必ずしも満足には繋がらないという事態であって、途絶えることのない欲望の充足によって補完しなければならないが、それが満足をもたらすことはないというわけである。この事態における深い反省が次なる段階を用意するわけであるが、フランス現代思想はこの段階において絶望を半永久的にもたらすことのない方策を用意していることも併せて考えておかなければならないだろう。

第二章 ブルトンの美とコジェーヴの美の定義

『宣言』の中には美についての定義らしきもの

は存在しない。もっともこの点についてアルキエは『シュルレアリスムの哲学』において次のように書いているのだ。「そして私は、ブルトンの感動と希望は、初めから、美の前での感動であったし、美への希望であったということをよく知っている。つまり『宣言』は時として美の中でだけ、イメージの価値の規準を探しているようにさえ思われるのである。更にブルトンが、その本質において捉えられた美が彼にとって意味したものを深く意識するまでには、そして『現行犯』において美はこの領域においては大きな隠れ家であると書くことができるまでには、長い道程を辿らなければならないだろう。」(PS p.12)

従ってこの『宣言』とほぼ同時期に書かれたテキストの中から美についての定義らしきものを探すならば、それは1927年の夏以降に書かれた『ナジャ』の中に見出すことができる。ただし、この『ナジャ』はいわゆる理論書ではなく、通常の文学的範疇に従うならば小説ということになるであろうが、それにも拘わらずテキストの中にはブルトン自身の考えも示されており、ここにシュルレアリスムの概念を見て取ることも十分に可能である。それは次のように『ナジャ』の最後においていささか唐突に書かれている。「ここからある態度が必然的に美に関して生じるが、それはここでは美への情熱的目的においてしか一度も考えられたことがないというのは明らかすぎる程である。(中略)美は急激でむらのある動きから作られていて、その多くはほとんど重要性を持たないが、我々の知っているものは、多くのそれらを持つ一つの急激なむら(下線原文)をもたらすことを決められているものなのである。それは私が手に入りたいとは思わないだろうあらゆる重要性を持っている。精神はそれが持っていないいろいろな権利を所々方々で僭取する。美、動的でもなく静的でもない。(中略)美は痙攣的で(下線原文)あ

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

るだろう、そうでなければ存在しないだろう。」
(PI pp.752-753)

いささか難解であるが、重要な点を指摘するならば、美という対象はこの現実中存在するという^{こと}であり、またその美を捉えるなり認識する精神とは理性的なものではあり得ず、情熱を伴った感覚的なものであるということである。またブルトンが先程の引用部分の前段階でヘーゲルを引用していることから、アレクサンドル・コジェーヴの『ヘーゲル読解入門』における美の定義を確認するならば、次のように書かれているわけである。「しかしながら、知識人は本当に満足しているわけではない。(中略)彼は世界がそうであるようにそのままにしておき、それを享受する(下線原文)ことで満足する。(中略)所与(下線原文)の肯定的評価は芸術的態度としては典型的である。与えられた(下線原文)世界は、悪として捉えられることをやめることによって、美として捉えられることしかできない。」(ILH pp.205-206)

つまりここにおいて指摘できることは、美とは現実の全面的肯定と言うのが言い過ぎだとしても部分的肯定であることは明らかであり、またそれが美であるということは主体の精神によって認識されるということである。『宣言』の最後において「私が考えているようなシュルレアリスムは、現実世界の訴訟において、弁護側の証人として召喚することが問題になり得ないくらい十分に我々の絶対的非順応主義(下線原文)を表明する」(MSJ p.55)(MSG p.63)(PI p.346)と書くブルトンにとって、現実肯定という立場は相容れないように思われるが、美とは既にそこに存在しているものであり、後はそれをどのように認識していくかという主体の側の問題となるわけである。つまり情熱を持たずとも現実に露呈されていると表現されるが如きに現実に美が存在しているわけではなく、むしろその意味においては美はほとんど存

在しないとも言い切れる程である。しかしその現実の中であって、その隙間を縫うかの如く美が存在する。ただしそれは美として厳然と存在するというわけではなく、あくまでそれを美として捉える者が存在しなければならぬのである。この意味においてアルキエは『シュルレアリスムの哲学』において次のように書いている。「人生から切り離され見世物として客体化され得るであろう全ての美が文学的であるように見え、そしてその文学が拒否されるのは、この限りにおいてなのである。(中略)客体化することができない美は、この言葉が今日全く別の雰囲気を感じさせなかったとすれば我々は実存的と言うであろう心のときめきの内部にしか捕らえることができない。」(PS p.12)

このような事態は両面から捉えることができ、つまり客体化された美というものが存在しないということから、美を探究する精神の存在が必要とされるわけであるが、美を探究する精神の側から見れば明らかに美は現実に存在するというわけである。我々がいかに高邁なる精神を所有していたとしても、この現実に生きる上にあたっては即自存在を抜きにして語ることはできないわけであり仮に欲望の充足ということを問題にするならば、対象となる存在が確実に現実に存在しなければならぬということも明らかである。サルトルが飢えた子供達を前にして文学が何の力をも持ち得ないことを嘆いたように、食欲を満たすためには質量のことは問題になるにしても食物自体が存在していなければならない。従って全面的ではないにしても部分的に現実を肯定することができなければ、我々は生きていくことができないわけでありそれは食欲という即自的次元の欲望の充足に留まらず、美の探究という精神的次元における欲望の充足においても同様である。そして美の存在が現実に認められるということ的前提にするならば、次に問題になってくるのは、いかにしてそれを捉

加藤 彰彦

えていくかといういささか技術的な問題となる。これは、存在していることは存在しているが、容易に認識できないために見分けるといことをしなければならぬ場合と、既に存在しているものに手を加えることにより美を見出すことができるようになるという場合が考えられる。これこそが一方で現実を肯定しながらも美を探究するシュルレアリスムの技法であり、この対極にある美の存在とはアルキエが『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、次のようなものである。「大部分の人達がまさに美を自分達の生活から切り離し、それを抽象的で形式的なものに見なし、平日にはごくありふれた人の生活、そしてブルトンもまた言っているように 犬の生活 を送りながらも、毎週日曜日にそれをじっと眺めるために壁にそれを掛けることに同意するのは、この幸福を気にするからである。」(PS pp.18-19)

美はこの現実に確実に存在するという認識は間違いなく生の喜びをもたらすこととなるだろう。後はそれをどうやって見出していくかという我々の精神の側の問題となるのである。つまり我々が正しくその術を身に付けていくなれば、必ずや美に遭遇できるというわけである。ここにおいて現実を否定したり解体したりする必要は全くない。問題とすべきは我々の精神の方なのである。また美を探究する情熱については、既に充分存在する。従って後はいかに知的に対応していくかということである。それは既に指摘したように、シュルレアリスムの技法として捉えることのできるものもあれば、フランス現代思想によって明確に証明することのできるシュルレアリスム的な思想でもある。そしてこれが成立し得る前提にあるものが、現実肯定という立場であり、『宣言』はその立場を明確にしていると言うことができる。

第三章 『宣言』における美的段階

現実の中に美を見出したいとする現実肯定の考え方は、例えば『宣言』においてブルトンが次のように書いていることから明らかだろう。「幻想的なものの中にある感嘆すべきこと、それは最早幻想的なものは存在せず、最早現実しか存在しないことである。」(MSJ p.25)(MSG p.25)(PI p.320)

現実世界の告発を掲げるシュルレアリスムが現実肯定の立場をとる時、現実のいかなる部分に美を見出すかと言うと、ブルトンにとってそれはまず幼年時代なのである。「何らかの明晰さを失わないでいるなら、調教師達の配慮でどれ程台無しにされていたとしても、それでも尚魅力が一杯に思われる自分の幼年時代にだからこそ頼ることしかできないのだ。そこでは、既に承知しているあらゆる厳密さの欠如が、同時に送れるいくつかの人生の見通しを奪うことはないのだ。最早あらゆる物事の束の間の極端な安易さしか知りたいとは思わないのだ。毎朝子供達は不安を持たずに出かける。全ては間近にあり、最悪の物質の状態でも素晴らしい。森が白くても黒くても、人は決して眠ることはないだろう。」(MSJ p.15)(MSG pp.11-12)(PI p.311)

また「真の生に最も近付くのは恐らく幼年時代なのだ。それ以上になると、通行許可証に加えて、何枚かの優待券しか自由に使用できない幼年時代、しかしながら全てが効果的で危険のない自分自身の所有のために協力していた幼年時代。」(MSJ pp.48-49)(MSG p.55)(PI p.340)

幼年時代というものは現実に確かに存在するわけであるが、自らの幼年時代として捉え得るようになる時点において、つまり自らの幼年時代は存在したと過去形で語らざるを得ない状況において幼年時代は確かに存在したということは言えてもその幼年時代を今現実のものとして生きることに

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

は無理があるだろう。この点についてはブルトンも承知していて、「しかしそんなに遠くまで行かないであろうということも事実だし、距離だけが問題ではないのだ。」(MSJ p.15)(MSG p.12)(PI p.311)と書いている。

次に現在進行形のものとして捉え得るものが恋愛である。精神的な高みとか理想といったものを問題にしなければ、欲望の充足といった立場では事はそれ程難しくはない。仮に理想を問題にしても数多くの女性を相手にすることを考えなければ、現実的ではないつまり例外的存在と言える女性を一人でも確保すれば事は解決する。その例が『ナジャ』であって、結果的には恋愛成就とは言えないのであるが、恋愛においてはシュルレアリスムは可能ということを示している。ただしこの例外的存在をも見出せないとなると、ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』におけるように人造人間を作るという発想に至ることも考えられる。ブルトンにとって恋愛は中心的主題であるはずなのだが、『宣言』においては意外な程恋愛については触れられていない。例えば『宣言』においては次のように書かれている。「あらゆる生きる理由が少しずつ欠けていくのを感じてしまうために、ずっと後になってここかしこで自分を取り戻そうと試みても、恋愛のような例外的状況と同じ高さにいることは不可能になってしまい、成功することはほとんどないだろう。」(MSJ p.16)(MSG p.12)(PI p.312)

恋愛がブルトンにとって最重要課題であることはこの表現からも窺われるが、あまりにも個人的課題であるためかあるいはむしろシュルレアリスムとしてはもっと広い見地からの問題に取り組みたいという考えからか、恋愛についてはこれ以上深く論及されていない。次に現実の中に見出せる肯定的部分として捉えられたのが夢であって、これは『宣言』の中においても中心的な主題となっ

ている。つまり「フロイトが夢に彼の批評を聞かせたのは非常に正当である。心的活動のこのかなりの部分(何故なら、少なくとも人間の誕生から死まで、思考はいかなる中断も見せないし、夢の瞬間の総和は、時間という観点から、まさに純粹の夢つまり睡眠時のそれしか考えないとしても現実の瞬間、目覚めの瞬間と言うことにしておこう、その総和に劣るものではないからだ)が、それでもほとんどそんなに注意を引かなかったのは、実際のところ容認できない。」(MSJ pp.21-22)(MSG p.20)(PI p.317)

夢が理想的世界であるなら、夢に生きるということも可能だろうが、それでも夢から目覚めている時間をどうするかという問題が残ってくる。つまりブルトンは次のように考えるのだ。「そうしながら、私を占有している 現実 が夢の状態で存続すること、それが記憶にないくらい昔に失われていることが何ら証明されていないのであるから、私が時として現実に対して拒否するもの、例えばその時には私の否認に何らさらされない現実自体におけるこの確かさの価値を、何故私は夢に与えないのだろうか。毎日より高くなる意識の度を私が期待する以上に、夢の手掛かりを何故私は期待しないのだろうか。夢もまた、人生の基本的な問題の解決に適用され得ないのか。」(MSJ p.23)(MSG pp.21-22)(PI p.318)

夢を研究し夢に依存する形で現実を肯定的なものとして捉えていこうとする姿勢は、まさにシュルレアリスムそのものと言ってよく、またその中の中心概念である超現実も夢と現実の融合という形で捉えられている。このような考え方は文学・芸術の分野においては極めて有効であり、かなりの影響を及ぼしたと考えられる。しかしこれで言わば実存的次元における生の問題は解決したかというところではないだろう。それはいかに夢に価値を見出そうとも、我々にとって夢から目覚めた

加藤 彰彦

現実の世界というものは厳然として存在するわけであり、従って我々は夢と現実という二元論から逃れられないわけである。仮に夢と現実とは別個に超現実が存在する、現実的にそのような選択肢が用意されているというのなら、迷わず超現実を選択するということが問題は解決するわけであるが、そうはなっていない。そこでより現実的に対応していくということから注目されているのが言語である。ブルトン自身、「言語はシュルレアリスム的使用をするために人間に与えられたのだ。」(MSJ p.42)(MSG p.46)(PI p.334)と書いているように、言語はシュルレアリスムを実践する上で有効な手段であるわけだ。それもただ単に文学の領域においてというわけではなく現実全般においてなのである。ブルトンは次のように書いている。「私が常に価値あるものにしようと努めていて、人生のあらゆる状況に適合するように私には思われる留保なしのこの言語、この言語は私から私の手段のどれも奪い取らないだけではなく、私にまれにみる明晰さを与え、そしてそれは私がそれに対して最も期待していなかった領域においてなのである。」(MSJ p.43)(MSG p.47)(PI p.335)

言語をシュルレアリスム的に用いる一つの用例として、シュルレアリスムのイメージの創造があり、直喩も連想も思い浮かばないような二つの言葉を結び付けることにより可能とされる。これは言わばシュルレアリスムの詩論と言うべきものであるが、こういった文学的領域に留まることなく現実において日常的に成立している対話を単なる話の流れや展開という形ではなく無意味にずらせることにより、言葉を真実を覆い隠す装飾品のようなものではなく、まさに現実にある物として認識させるという効果をもたらすわけである。しかしこれも結局のところ文学的領域といった限定された使用とならざるを得ない。従って文学・芸術といった領域においてシュルレアリスムがかなり

の影響力を持ち得たにしても、言わば実的な生き方としてどこまで有効であったかということ、この『宣言』においては漠然とした期待を抱かせつつも、詳細に検討してみるならば、いささか行き止まりを感じないわけにはいかない。もっともこの点についてブルトンは既に諒解済みであるかの如く、言わば楽観的な姿勢を示している。例えば超現実について触れた後次のように書いている。「私が向かうのはその獲得にであり、それに成功することはないと確信しているが、私の死をあまりにも気にかけていないので、このような所有の喜びを少しは算出しなくもないのである。」(MSJ p.24)(MSG p.24)(PI p.319)

また詩の問題に触れて、「この擁護とそれに続くであろう顕揚との間にもし何らかの不均衡があるとしても構うことはない。詩的想像の源泉に遡り、そしておまけにそこにいることが必要だったのである。これは私がしてしまったと主張するものではない。全ては最初非常に不完全に行なわれるように見える遠く離れたこの地域で居を定めたいと思うためには、ましてやそこに誰かを案内したいと思うためには、大いに自制しなければならない。しかも完全にそこにいると確信することは決してないのだ。どうせ居心地が悪いのなら、いずれにせよ他の所に滞在する気になっている。とにかく一つの矢印が今これらの地方の方向を指し示していて、本当の目的の達成は最早旅人の忍耐力次第でしかないのは事実である。」(MSJ pp.28-29)(MSG p.29)(PI pp.322-323)

つまりブルトンにとってシュルレアリスムの真の目標に到達することは、失敗するとわかっていても、それでも目標達成のために頑張り続けるということであり、ここにおいて明らかになってくるのは、目標それ自体や目標に到達することそのものが意味を持つのではなく、むしろ目標それ自体は空虚であり、そこに向かって頑張っていくこ

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

と自体に意味を見出しているように思われる。そのように考えるならば、『宣言』はそれ自体としてはこれで一つの完結を見ながらも、実存的生き方の問題として捉えた場合、美的段階ではなく次の段階が用意されなければならないであろうと予期される。

第四章 美的段階に見られる弁証法

現実を全面的にはではなく部分的に肯定するということではあっても、現実を選択肢が用意されていて、そこから任意に自分の気に入ったものを選択するというのであれば、対応はそれ程難しくはないであろうが、シュルレアリスムにおいては若干手を加えることにより現実を肯定していく形を取る場合がある。例えばその一つは超現実であって、『宣言』における定義らしきものによれば、「夢と現実という、見かけでは非常に矛盾しているこれらの二つの状態が、一種の絶対的現実、このように言うことが可能なら超現実（下線原文）に将来溶解することを私は信じている。」(MSJ p. 24) (MSG pp.23-24) (PI p.319) とあり、夢と現実が融合することで、何か別のものとして提示されたものが夢の特長を持った現実ということになるのかもしれないのであるが、具体的にどのようなものであるかは明らかではないが、超現実を捉えるためには、そこに弁証法的理解が介在しなければならないことは明らかである。また、シュルレアリスムのイメージとして提示されたものについても、ブルトンは『宣言』において、1918年の「ノール・シュド」誌に公表されたピエール・ルヴェルディの考えを引用している。「イメージは精神の純粋な創造物である。／それは比較からではなく、多かれ少なかれかけ離れた二つの実在の接近から生まれることができる。／近付いた二つの実在の関係がより遠く隔たっていて狂いのないものであればあるだけ、イメージはより強くなる

だろう イメージはより大きな感動の力と詩的実在を持つだろう。」(MSJ p.30) (MSG p.31) (PI p.324)

つまり個々の実在、具体的には個々の言葉が現実存在することは当然のこととしてあり、ただ日常的に使われる言葉の組み合わせではなく、むしろ日常的には考えられないような組み合わせをすることにより、シュルレアリスムの効果が生じるというわけである。例えば我々は日常的にも言い間違いや勘違いということから、本来あり得ない言葉の組み合わせを生じさせており、それを意図的かつ効果的に行なうということは充分可能である。そしてこのシュルレアリスムのイメージを生じさせるためには、少なくともその前提として本来はあり得ない実在や言葉の組み合わせを想像の世界においてではあれ現実的なものとして諒解しなければならないが、その際に必要になってくるのが弁証法的理解なのである。この弁証法的理解に役立つと思われるのが、クロード・レヴィ＝ストロースによって提示された「料理の三角形」である。本来この考え方は生まのもの、火にかけたもの、腐ったものから構成されているが、ここでは二項対立を現実的に解消したものとして発展的に捉え考えていきたい。『クロード・レヴィ＝ストロースと構造人類学』を書いたマルセル・エナフによると、ここで問題になってくるのは「両極端のものを考え得るものにする」(CA p.379) ことなのである。また料理に関して言うと、「肉の料理は文化への接近の最初でかつ基本的な徴候として考えられる」(CA p.416) ということである。つまり肉を生まのまま食べるということが当然最初の段階としてあったわけであるが、それを火にかけることによって食べるという行為は、その前提において人類が火を獲得しそれを支配するということが必要になってくるわけであり、ここに文化の成立を見て取ることができるわけである。そ

加藤 彰彦

してこの生まのものと火にかけたものの対立とは別に、エナフは料理における対立として「新鮮なものと腐ったもの、液体を加えたものと焼いたもの、煮たものと焼いたもの」(CA p.417)があることを指摘しているが、ここではその対立の最初のものである「新鮮なものと腐ったもの」と重ねて考えていきたい。まず生まのものであるが、腐ったものとの対比を明確にするために新鮮なものとして提示する。食物として捉えた場合、新鮮なものは食べられるし食べておいしいものである。それに対して腐ったものは、食べられないし食べてはいけないものである。日常的にはこのような二項対立が存在する。しかしこの二項対立を発展的に解消するものとして、つまり腐っているが食べられるものが存在するのである。ここにおいて、腐っているものは食べられないという画一的な否定は打ち消される。この具体例としては、発酵食品つまり味噌、納豆、ヨーグルト、ワインといった食品が挙げられ、これらは最早特別なものではなく、まさに日常的なものであり、更に言うなら健康にもいいという評価さえ受けている食品である。ここにおいて重要であるのは腐っていて食べられないものは依然として存在することであり、腐っているが食べられるものの出現によって消滅してしまっただけではないということである。更に腐っているが食べられるものは、新鮮で食べられるもの、腐っていて食べられないものと同様に食品における確固たる位置を保有しているということである。腐っているが食べられるものとは最早想像上の産物でもなければ抽象概念でもなく、極めて日常的なものなのである。この意味において超現実とは具体的なものであるとは捉え難いし、抽象的概念と規定されることになるだろう。またシュルレアリスムのイメージは今日では広告業界などにおいても多用されていることから、文学・芸術の領域に限定されるものではなくなっている

が、広告において主張される現実からの脱却、非日常性への移行という点に注目するならば、依然として現実のものとはなっていないという風にも考えられるだろう。そのため現実にあるものの中でシュルレアリスム的なものを探っていくという方法が考えられる。例えば『宣言』には次のように書かれているのだ。「超自然的なことはあらゆる時代において同じというわけではない。それはその細部だけが我々に届く一種の普遍的啓示に漠然と似ている。例えばそれは浪漫派の塵墟(下線原文)、現代的なマネキン人形(下線原文)、あるいはある時代を通して人間的感受性をつき動かすのに適した全く別の象徴である。」(MSJ p.26)(MSG p.26)(PI p.321)

これらのものを判別するのはどのような方法によるのかと問うならば、直感によるとしか答えられないのかもしれない。ただし、我々が捉え得る範囲はあくまで現象界に限られるとするならば、本質を捉えることはできないにしても、本質に言及し得る指標の存在を求めなければならない。ミシェル・フーコーは『言葉と物』において、目に見える形での区別が出来なければ比較も分類も出来ないことを指摘している。そしてその手掛かりとなるのが指標なのである。例えばパークリーの『人間知識の原理』を引用し、次のような考えを示している。つまり「人が見ている火は、私がそれに近付くなら私が受ける苦痛の原因ではない。つまりそれは、その苦痛を私に予告する指標なのである。」(MC p.74)

またリンネの植物学を例にして、指標の問題について触れている。「体系(下線原文)は、記述が詳細に並置する要素の中であれやこれやの範囲を定める。それらの要素は、特権のある、実を言えば排他的な構造を明らかにするのであるが、その構造については同一性と差異の全体を研究することになるだろう。これらの要素の一つにも関わ

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

らないであろうあらゆる差異は、どうでもいいと見なされるだろう。(中略) その範疇の他の全ての種が最初の種と比較され、不一致の特徴は遠ざけることになる。結局、この仕事の後で指標が生じるのである。」(MC p.152)

フーコーも指摘するように体系としては恣意的なものになるであろうが、何か対象を分類する、つまりシュルレアリスムの見地から肯定し得るか否かについて判別するためには、極めて細小な部分である指標に注目せざるを得ないわけである。というのも、現実の中に肯定できるものを見出したいブルトンにとって、大ざっぱな捉え方をすれば現実を否定せざるを得ないからである。いわば現実を細分化することによって、肯定的に捉え得る現実に見出すというわけである。しかしこのような試みは、ここにおいて完結してしまうようなものではない。既に指摘したように、超現実が何ら具体的なものとして出現することなく絶えず目指すべき抽象的概念であり続けるのは、アルキエモ『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、超現実を「シュルレアリスムの意識の目的」(PS p.156)としているためであり、仮にこれが現実において容易ではないにせよ獲得できるものであるとするならば、その時点でシュルレアリスムは終わりを告げなければならない。それはシュルレアリスムが完成を目指す芸術の流派ではなく、あくまで実存的な生き方を目指すものだからである。このように考えるならば、超現実の獲得は目標ではありながらも、その目標が達成されてはいけぬものであることも容易に理解されるだろう。もちろんどんなに頑張っても超現実を獲得できない仕組みにはなっていて、それは超現実が言わば抽象的概念であり、何ら現実化を求めるものではないからだ。あるいは敢えて言えば、「正義」とか「愛」とかいった抽象的概念が人々の精神の中に生じるという意味において

の現実化は可能かもしれない。しかしそれでもって超現実の獲得と称するのは、精神を物体と見なすことであり、あまり意味のあることではないだろう。むしろ現実肯定というのは、肯定されるべき現実がたとえ部分的であるにせよ客観的に存在するというのではなく、現実のある部分と我々の意識との相関関係において、その現実のある部分が肯定的に捉えられるに至ったと考えるべきである。しかしこれは言わば幸福な事態であって、肯定し得る現実が存在し得たということなのである。我々の立場の弱みは肯定し得る現実が存在しなければならぬという前提条件であり、現実に合わせて我々自身の意識を変えていくという方策もないことはないであろうが、仮に肯定されるべき現実がない場合我々としては弁証法的に更に高次の段階を目指さなければならないと思われる。

第二部 『第二宣言』と実存の倫理的段階

第五章 実存の倫理的段階

キルケゴールによって提示された実存の倫理的段階も、言わば定義付けられたものとしては示されていないので捉え難い面があるが、社会的秩序の中でその秩序を維持していくために個人として為し得ることを全うする立場という風に解することができるかと思う。例えば美的段階として捉えられる恋愛も、結婚という形をとることによって倫理的なものとなるわけである。社会的秩序が形成されるためには、社会を構成する個人全員に義務が課せられ、その義務を果たすことこそが求められるわけであるが、それに対して価値を見出し各個人が強い意志をもってその義務を果たしていることが倫理的なのである。個人には義務を果たすという社会に対する責任があるとする考え方が示されているわけである。

第六章 倫理的であることがもたらす様々な問題

倫理的ということをはどく難しい問題とさせているものは、倫理的であるということは普遍的であるということであって、各個人によってその在り方が大きく異なるということであってはならないということである。例えば大災害が起こることによってある地域の人達が甚大な被害で苦しんでいるという状況において、その地域の人達が困難な状況にも拘わらず協力し合うとか、他の地域の人達が何らかの形で援助するということは、倫理的であるとする事で容易に理解することができる。それは現前において展開されている事態がわかりやすく、また被害もほぼ全員に及び一様であるということも問題をわかりやすくさせているからである。ところがまさに過酷な生存競争という状況において、他人のことは構ってはいられないという非情な利己主義が各個人の意識において支配的である場合、倫理的とはいかなるものであるか。もちろんこの場合においても、あくまで利己主義に陥ることなく他者の生存や尊厳を守ることこそが倫理的であるとする考え方は成立すると思う。つまり実践している人が数少ない例外的存在にすぎないとしても、社会にとっての普遍的原理は依然として有効なのである。ここにおいて既に崩壊してしまっている社会という概念は、まだ意識の中においては維持されているわけである。ところが過酷な生存競争という程でもない日常的状況において、嘘をつくということがもたらす問題がある。例えばカントは『実践理性批判』において真実を言うことの義務について触れている。ここで殺人犯に狙われている友人を家に匿っていた時に、その殺人犯がやって来て、その友人の所在を確かめた時に、嘘をついてはいけないと主張しているわけである。カントにとっては仮言命法と定言命法が存在し、前者はお金を儲けたければ正直であれといった条件付きのものであるが、後

者はいかなる時においても守らなければならないものとなっている。嘘をつくこと自体は必ずしも好ましいものではないが、極限的状况といった極端な場合でなくても、日常的に嘘をついてもより正確には真実を言わなくてもよいと思われる状況は存在する。むしろ先の例で言えば、言うべきではないとさえ考えられるわけである。しかしこのような場合でも真実を言うべきであるとするカントの考え方はいささか理論が勝ち過ぎていると思うが、この真実を言う言わないもしくは言うべきではないという判断については、倫理的かどうかという問題は別にあるにしても、ある程度の共通認識が成立するように思われる。ところが真実を言うということに関わる更なる問題は、真実を言っているにも拘わらず、社会によって真実を言っていない、嘘をついていると認識されてしまう状況において、真実を言うことに伴う倫理的問題は一体誰のために何のためにあるのかという形で提示される。真実を言っているにも拘わらず、真実を言っていないと断定されてしまうならば、一体どうすればいいのかということになる。考えられる対応としては、真実を繰り返す言い続けるということになると考えられる。あくまでそれが真実であることを社会によって認識してもらうのである。もちろんそれがどういう結果をもたらすかは一定していない。むしろここにおいて問題とすべきは、社会が求めているのは真実ではなく、真実以外の何か虚構を社会は求めているのだということである。そしてこのような社会において、仮に真実を言うということが倫理的として成立し得るのかという問題に至るわけである。確かに表面上は真実を言うということが求められており、だからこそ真実を言っているにも拘わらず真実を言えと迫ることができるわけである。しかしその意図するところは決して真実を言えと言っているわけではなく、社会にとって都合のいい話

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

をしると求めているということなのである。ここにおいて倫理的であるということは、個人の問題に留まることなく、その前提として社会の在り方も問題になってくるということの意味する。真実を言うことを求めない社会にあって真実を言うという倫理的課題に応えることは、現実的にはかなり難しい事態をもたらすだろう。もっともこの場合においても、自分は社会よりも神に対して真実を言うことを倫理的だと考えることによって、あくまで真実を言い続けるという立場をとることは可能だろう。そしてこれよりも更に困難であると思われるのが、ウィリアムズ・スタイロンの『ソフィーの選択』が提示した問題であって、ある母親が自分の二人の子供のうち、いずれか一人を助けるが、もう一人はガス室送りにする、そしてどちらの子供を選ぶかは母親に任されているという選択をナチスの士官に迫られた時、上の子供である娘を犠牲にし、下の子供である息子を瞬時の判断によって助けるという選択をしてしまうわけであるが、この決断に対して罪悪感に囚われ、終には彼女自身自殺してしまうという結果において、何が倫理的であるかと答えるのは容易ではない。下の息子を犠牲にすればよかったという問題ではないし、ナチスの士官の提案を拒否し、二人の子供を犠牲にしてしまうこともできない。それならまだどちらか一方でも助かる方がましであると考えくらいである。そしてここでも明らかになることは、倫理的であるためには個人としてどうあるかということも重要であるが、その前提として個人が倫理的であることがその意志や決断によって可能となるような状況を社会が提示していなければならないということである。これは必ずしも物質的条件というわけではなく、むしろ社会を構成する各個人の意識の総体とも呼ぶべきものである。ただしこの倫理的問題を更に難しくしているのは、一見もっともらしい社会の要求に無条件

に応えるのが倫理的かということと必ずしもそうではないだろうというのが、例えばサルトルの考えである。サルトルは『存在と無』において、自分自身で考えるということをしないうり方を「杓子定規な思考」と呼んで、次のように説明している。「従ってあらゆる杓子定規な思考は世間によって深まり、凝固するのである。それは世間のために人間的現実を放棄することである。杓子定規な人は世間に属して、最早自分自身を何ら頼りにしない。彼は最早世間から外に出る（下線原文）機会すら考えない、というのも彼は彼自身にあって岩のような存在の仕方、堅実さ、惰性、世間の中での存在という不透明性を手に入れたからである。杓子定規な人は彼自身の奥底に自由の意識を埋めていることは明らかであるし、彼は不誠実（下線原文）であり、そして彼の不誠実は眼前で結果として自分を提示しようと狙っている。つまり全ては彼にとって結果なのであり、決して原則など存在しないというわけである。」（EN p.669）

つまり個人が倫理的であるためには、その前提として社会がその倫理的であることを可能にするような意識を共有していなければならないが、そのような前提条件の有無に拘わらず、自己を社会にとって都合のいい存在に仕立て上げてしまうこと、そしてそのことにより倫理的ではないがある種の利益を社会から受け取ることをサルトルは批判するわけである。ここにおいては先の例で言うなら、真実が求められているわけではなく、社会によって真実と認められた虚構が求められているというわけである。従って倫理的であるためには倫理的であるとされている格率を無批判に実行するのではなく、倫理的であるために社会の状況について検討を加えたとともに、自分にとって何をすべきか何をしたいと思っているかを深く考えていくことが必要となってくるであろう。それは倫理的であることがそもそも一体誰のために何のた

めに求められているのかという本源的な問題も併せて考えることを必要としている。

第七章 『第二宣言』における倫理的段階

シュルレアリスムの実践を他ならぬこの現実において行なわなければならないということから、シュルレアリスムにとってあるいはシュルレアリスムの実践以前にこの現実との関わりの問題が生じてくる。この場合の現実とは、『宣言』において明確に打ち出されていた否定されるべき現実とは性質を異にしている。『宣言』において捉えられていた現実とは「現実世界の訴訟」(MSJ p.55) (MSG p.63) (PI p.346) といった表現のすぐ後に、「それは逆に我々が現世で達することを強く望んでいる放心の完全な状態しか証明することができないだろう。」(MSJ p.55) (MSG p.63) (PI p.346) と書かれているように、シュルレアリスムを実践する場であり、可能性に満ちているわけである。しかし『第二宣言』に見られる現実とは、シュルレアリスムを実践していく上でまず戦わなければならない対象なのである。それは『第二宣言』の初めの方に次のように書かれていることから明らかだろう。「しかしながら、これらの会計検査に取り掛かる前に、シュルレアリスムが厳密にいかなる種類の精神的美德に訴えるのかを知ることが重要である、何故なら、私が空模様、腕時計の音、寒さ、体の不調といったような逸話をこの生活に再び入れ込むなら、つまり私が再び通俗的なやり方でそれらを話し始めるなら、いずれにせよそれは生活の中にそして恐らく偶然にではなく、今の生活 (下線原文) の中に根を下ろすからである。これらの物事を考えること、この破損した梯子の任意の横木に執着することは、禁欲主義の最終段階を乗り越えてしまわない限り、誰もそれから逃れることはない。美と醜、真と偽、善と悪といった不十分で不条理な区別を無視したいという

欲望が生まれ維持されるのは、意味のないこれらの表象のまさに鼻持ちならない湧出からである。そして最後に住むことのできる世界に向けての精神の多かれ少なかれ確かな飛び立ちは、この選択の概念が出遭う抵抗の度合次第なのであるから、シュルレアリスムは絶対的反抗の、完全な不服従の、正規の妨害行為の教義を作ることを恐れはしなかったし、おまけに暴力以外の何ものにも期待しないことを人々は理解するわけである。」(MSJ pp.134-135) (MSG p.78) (PI p.782)

つまり『宣言』において美的段階として恋愛や夢や言語などを問題にしていたのとは違い、事態はまさに現実における暴力を問題にするに至っているわけである。このことについてブルトンは自覚的であって、『第二宣言』においては続いて次のように書かれている。「私はそのこちら側では何ものもこの信念を正当化することはできないであろう人間的絶望を、ここにおいてもう一度話題にしたかっただけである。ある信念には同意を与え別のものには与えないということは不可能である。本当にこの絶望を共有することなしにこの信念を受け入れるふりをするであろう者は誰でも、経験ある人々の目にはまもなく敵の姿をとり始めるだろう。」(MSJ p.136) (MSG p.79) (PI p.783)

またこれらに関連して、注の部分では次のように書かれている。「私にとって、こういった人々の哀れな当て込みをはずすこと程簡単なことはない。そうなのだ、ある人物において暴力と折り合う(下線原文)か折り合わない(下線原文)かを自問する前に、その人物が暴力を持ち合わせているかどうかを知ることには私は頭を悩ませているわけである。」(MSJ p.135) (MSG p.79) (PI p.783)

つまりここにおいて、シュルレアリスムが美的段階から明らかに倫理的段階に移行していることが見てとれる。そしてその倫理的問題は、ただ単に我々は倫理的にどうあるべきかという抽象的議

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

論ではなく、まさに現実存在する暴力の問題として捉えられるわけである。ブルトンが暴力に訴えるしかないと書いているのは、もちろんその前提として暴力があるわけだが、注意しなければならないのは、この暴力の種類と性質が全く異なるということである。つまり殴られたから殴り返すといった次元の話ではないのだ。ブルトンにとっての暴力とは恐らくは行使されることのない最後の手段としての物理的暴力であって、ブルトンが否定する暴力とは、例えば眼前で展開されている事実を共有する形で体験しながらも、人を陥れるためにその事実とは全く異なった作り話をしたりそれを事実として追認したりする社会的暴力である。このような暴力に対応せずにシュルレアリスムの活動を行なっても、砂漠に水をまいたり潰されるとわかっているガラス細工を細心の注意を払って丹念に作っているようなものである。だからこそブルトンは『第二宣言』において、次のように書くのである。「このような隔たり、このような豹変、あらゆる種類のこのような背信が、私が身を置いていたばかりのまさに領域において可能であるためには、確かに全てはかなり大きな嘲笑の平土間で、一度に数人以上の無私無欲の活動を当てにする理由がほとんどないということではなければならない。もし革命的な任務それ自体がその達成が前提とするあらゆる厳密さでもって、一挙に善人と悪人をそして本物と偽物を区別することができないなら、そしてもしそれに大損害を与えて、一連の外的出来事がある人々の仮面をはがすことを引き受けるのを待ち、そして別の人々の素顔を不滅の映像で飾らざるを得ないなら、更にいわゆるこの任務ではないもの、そして例えばこの第二の任務が第一のものだけ混ざることのない範囲でシュルレアリスムの任務についてもっと悲惨にならないことを、人はどのようにして望むことになるのだろうか。」(MSJ p.157)(MSG

pp.107-108)(PI p.801)

つまりシュルレアリスムにとって倫理的問題とは、シュルレアリスムの本来の活動を行なう上で前提的に処理しなければならない問題ではなく、シュルレアリスムにとって中心の問題となっているわけである。場合によっては、シュルレアリスムとは関係のない状況においても真剣に取り組まなければいけない問題とも言えるのである。何故なら暴力とは我々がその対象として行使されるものであるため、現実の生活において無視できるものではないからである。またこの暴力に対抗することの難しさは、他の人が作り話をして人を陥れようとしているのに対して、我々はただひたすら事実を主張するしかないわけであるが、その事実を事実として承認することが社会を形成する他の人達によって行なわれなければ最早どうしようもないわけであり、また他の人達が事実を事実として承認することを期待することは恐らくは無理であろうと考えられるわけである。それは他の人達の存在を成立させている欲望がさせていることであって、その欲望更にはその存在自体を無化するというのもできることではない。更に他の人達が作り話をしているからといって、我々がそれに対抗するかのように作り話をすることもできないしすることはないのである。ここにおいて言えることは、美を追求していたブルトンとは実は善の人であったということである。アルキエは『シュルレアリスムの哲学』において次のように書いている。「逆にブルトンは次のように書いているのだが、私が常に私の熱狂の主な主題を見出したのは 道徳においてである。」(PS p.43)

また、「彼はそれどころか、善と存在の味方になるのであって、この点でクロード・モーリャックが、ブルトンは 善しか愛さず、そのためにのみ生きる と書いているのは正しいのだ。」(PS p.50)

加藤 彰彦

しかし問題は具体的にどう対抗していくかという
ことである。真実を言っているのに、それは真
実ではないと言われる状況においてどうするか。
真実に対してそれを真実ではないと言わしめてい
るのは、それが真実ではないとする正当な理由も
しくは根拠があるわけではなく、それをその人達
が持つ欲望が言わしめているということなのであ
る。従って真実を真実として承認してもらうため
には、何か別の欲望の対象を用意するしか他に方
法はないのではないと思われるが、その場合に
おいても真実が真実として認められたのは、それ
が真実であるからではなく、それを真実と言った
方が恐らくは得であるという欲望の現われにすぎ
ないだろう。このような状況においてブルトン
は、『第二宣言』の終わり近くにおいて次のように書
いている。「シュルレアリスムの作戦は、話して
いるのを聞きたいと思う人達が今だにほとんどい
ない道徳の無菌状態において行なわれるならとい
うことでしか成功させる可能性がないと、我々は
言っているのである。しかしながら、このような
無菌状態がなければ、かなりまともに存在し得る
であろう他のものが存在していないのに、ある
ものが存在しているということをはひどく痛
ましく考えるという事実に存在するこの精神の癒
を食い止めることは不可能である。我々は、これ
らが混ざらなければならない、もしくは奇妙にも
極限において迎撃し合わなければならないと主張
した。問題なのは、そこまでしておくことでは
なくて、必死にこの極限を目指すことしかできな
い（下線原文）ということである。」（MSJ p.189）
（MSG p.150）（PI p.828）

従って一気に全てが改善されるということは現
實的にあり得ないが、その目標と現実において可
能な手段があれば、たとえ地道な努力ということ
ではあっても、ただひたすら努力を続け、そのこ
とにより少しでも事態がよい方向に展開すること

に喜びを感じる他ないわけである。

第八章 倫理的段階における弁証法

真実を言っているにも拘わらずそれは真実では
ないと否認される時、そこにおいて問題になって
いるのは真実ではなく、まさに否認したいもしく
は否認しなければならない社会の欲望によっても
たらされた事態である。欲望が存在とともにある
ことを考えるならば、その欲望に支配された状況
において真実を言うことに一体何の意味があるの
か。そもそも真実を言うとは、一体誰のために何
のために為されるのかという問題がある。例えば
『第二宣言』の初めには、次のように書かれてい
る。「知的観点から問題であったし今も尚問題で
あるのは、人の側の異常なあらゆる動揺を避ける
ことを偽善的にも定められている古くからある二
律背反の不自然な特性を、あらゆる手段でもって
試練にかけ、何としても認識させることである。
このことは人にその手段の貧しい概念を与え、一
般的拘束から根拠のある範囲で逃れてみると挑む
ことにすぎないかもしれないのであるが。」（MSJ
p.133）（MSG p.76）（PI p.781）

この点については、デリダの二項対立を解体し
ていくという手法を応用すればいいということ
はわかっている。そしてそれは一回限りのものでは
なく、社会において二項対立を存続させ保持し
ようとする欲望に対抗して限りなく繰り返される
ことが求められるのである。先の例で言うならば、
真実ではないと否認されながらも真実を言い続け
るわけで、確かに真実を受け入れたくないという
欲望にとっては煩わしいことではあるだろう。ま
たこのような二律背反が我々の意識にも影響を
与え、我々自身が錯覚し続けてきており、現在も
尚錯覚しているという事態は程度の差こそあれ認
められるであろうから、自らの錯覚からの解放も
可能となるわけである。同様に先の例で言うならば

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

真実は他の人達によって否認されたとしても、少なくとも自分自身にとっては意味があり有効に作用するというわけである。これらの意義に加えて更に重要であると思われるのは、真実を解明しそれを認識することによって精神の力を増大させるとともに、それを明らかにすることでこの世界においてそれに呼応するものを見出しそれとの連帯関係を確立するということである。『第二宣言』においては次のように書かれている。「他のあらゆる理念のように、シュルレアリスムの理念は具体的な形をとり、事実（下線原文）の秩序においてよりよく想像し得るもの全てに従うことを目的としていて、これは愛の理念が人を創造することを目的とし、革命の理念がこの革命の日を到達させることを目的としているのと同じことであり、さもなければこれらの理念は全ての意味を失ってしまうだろう シュルレアリスムの理念は、単に我々の中におけるめまいのするような降下、隠された場所の組織的照明と他の場所が漸進的に暗くなっていくこと、進入禁止地域の真っ只中での果てしのない散策に他ならない方法によって我々の精神的な力の完全なる回復を目指しているということ、そしてその活動は人が動物を炎や石と区別することに成功する限りは終わるとい手堅いいかなる機会をも追い求めることはないということ

を思い起こさせよう。」(MSJ pp.145-146) (MSG pp.91-92) (PI p.791)

当然シュルレアリスムの試みは成功を目指すべきものであるのだが、真実を否認することに欲望を見出している社会に対して半ば腹立たしい言説行為を展開するよりは、たとえわずかであってもその効果を期待できる世界に対する活動は頑張りがいもあり喜びを見出し得るに違いない。つまり欲望に裏打ちされた虚偽は確かに一時的にせよ人々を動かし社会をも動かすということがあっても、それに対して真実はそれを

受け入れたくない欲望によって否認されつつも、必ずや何らかの反応なり効果をもたらし得ると考えられるのは、それがまさに実体を伴っているからである。「正義」や「愛」といった言葉はたとえ嘘であっても口にすることができるが、それが意味ある結果をもたらす場合、そこには実体があったからである。ブルトンは『第二宣言』において次のように書いている。つまり「行使されることで始まった詩の領域におけるシュルレアリスムの可能な限りの獲得物を算出し、シュルレアリスムが社会的論争に加担するのを見て心配し、そこで全てを失ってしまうと主張する人々の幼稚な異議に対して、ここで答える必要があるかどうか私はわからない。これは議論の余地なく彼らの側の怠惰であり、あるいは我々を追い込みたいと彼らが抱いている欲望の遠回しの表現である。(中略) それは、ヘーゲル以後、まさに思考において自分自身のためにしか働かない、そして自らについて深く考えるよう完全に導かれた意志の原則が残すであろう空虚を供給することを、ただちに落ち込むことなく怠り得る観念体系には属していない。(中略) 言葉のヘーゲル的な意味において、誠実(下線原文)とは 実体的 生活による主観的生活の風通しの良さ次第でしかあり得ない。」(MSJ pp.146-147) (MSG pp.93-94) (PI p.792)

つまり実体があるということは、必ずや何らかの反応や効果をもたらし得るということである。例えば、空腹を訴えている人の前にいくつかの箱があり、その中の一つの箱の中にだけ食物が入っている場合、食物の入っている箱を選べば、その中の食物を手に入れることができるが、中に何も入っていない箱を選んでしまえば、何も食べられないとなると、現象としては箱しか認識できないが、肝心なのはある箱の中に入っている食物であり、求められるべきは実体なのである。もちろん食物の有無が容易に認識できるなら、事態は容易

加藤 彰彦

に進行するであろうが、現状はそれ程簡単ではない。それでも結局のところ、実体があればそれはそれとして作用するはずなのである。実体の存在が認識されにくい、もしくは容易に判別されないようになっているという社会や文化の仕組みも同時に存在するであろうが、それにも拘わらず、つまり時間をかければ、あるいは我々がそれなりに意識に目覚めるならば、実体はそれとして認識され受け入れられることもまた何の不思議もないわけである。そして実体というものは、単に物質が存在することの言い換えではない。いわゆる抽象的概念と言われているものについても同様に適用可能であり、例えばある言葉を発したとしても、その気があるかないかの違いによって、実体的という形容を付けることができるわけである。デリダが音声中心主義を批判する時、例えば目の前で人が口頭で何かを発する時、それは確かにその人自身の口から発せられた言葉ではあるのだが、だからといって嘘をついているかもしれないわけであるから、そこに価値を見出すことができないと指摘した時、デリダは正しかったわけである。そしてこれは何も道徳的価値と結び付けてのみ語られる必要はない。例えば、現に雨が降っている時に雨が降っていると表現することは実体的であるが、雨が降っていない時に雨が降っていると表現することは実体的ではないと言うことも可能である。最もわかりやすい例は物質的次元におけるものだろうが、それに留まることなく、様々な領域においてこの実体的という概念を有効に作用させることこそ、ブルトンの求めていたものに他ならない。事実ブルトンは『第二宣言』において、次のように書いているのだ。「シュルレアリスムは、現実と非現実、理性と非理性、熟考と衝動、知と致命的な無知、有益と無益などの概念の訴訟に取り掛かる道に専門的に入っていくとしても、少なくとも史的唯物論とはヘーゲルの体系の巨

大なるお流れ から出発しているというこの傾向の類似を呈している。否定そして否定の否定に決定的に柔軟にされた思考の行使に、限界、例えば経済的な枠という限界を設けることは私には不可能に思われる。弁証法的方法が社会的問題の解決にしか有効に適用されないと、どうして認めるのか。シュルレアリスムの全ての野心は、最も直接的な意識の領域において少しも競合していない適用の可能性をそれに提供することである。」(MSG p.148)(MSG p.95)(PI p.793)

つまり唯物論的弁証法を単に経済的な意味合いで物に適用するだけではなく、必ずしも物質という形態をとってはいないが、それを実体と拡大して捉え、精神的価値、もっと現実的に言うなら、精神的なものではあるが人々の生活にとって役立つと考えられる精神的有用性を視野に入れて、弁証法を展開していくことが可能であるとブルトンは考えるわけである。そしてこのことは、シュルレアリスムの倫理的段階において真実が社会の欲望によって否定されることなく、真実として認識される可能性を示唆しているわけである。

第三部 『第三宣言』と『喫水部』と実存の宗教的段階

第九章 実存の宗教的段階

キルケゴールによる実存の宗教的段階とは、倫理的段階において持っていた実存的苦悩を、神への信仰という形で飛躍することによって形成される。しかし神との対話という形で事態は進行するので、外観的には前段階である倫理的段階とは変わるところがない。その外観に反して、内面的には倫理的段階におけるように社会に対しての義務ではなく、神に対する義務の問題に関わってくるために、実存的苦悩はより深刻なものとなる。いわゆる社会では許されていたものが、神の前では許されないということも生じてくるからである。

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

また神との対話とはそれ自体孤独なものである
で、社会における他者との相互依存もなく、苦悩
に満ちたものになるが、宗教的実存としては深ま
ると考えることができる。

第十章 『第二宣言』における実存の宗教的段階 の予兆とその意味合い

『第二宣言』において見られた倫理的段階とは
明らかに違った傾向が、既に『第二宣言』の中
に存在するのであるが、それは次のようなもので
ある。「私はシュルレアリスムの深くて本当の隠蔽
を要求する。私は、これに関しては、絶対的厳格
さを要求する権利を主張する。この世界への譲歩
もなく、恩寵もない。」(MSJ pp.181-182)(MSG
p.139)(PI pp.821-822)

そしてこの部分に付された注においては、次の
ように書かれている。「しかしこの隠蔽にどのよ
うにして取り掛かることができるのだろうかと、
人が私に尋ねていることは聞いている。シュルレ
アリスムは今度は歌で終わることを望んでいるで
あろう寄生的で(フランス的な)この傾向をなく
させることに存する努力とは別に、私は全ての昔
の学問の中にあつては占星術、現代のものにあつ
ては心霊研究(中略)である、今日では完全に貶
められた様々な観点に立つこれらの学問の側に、
確かな認識を広げていくことが全くの得策であ
らうと考えている。最小限の不可欠な疑念でもつ
てこれらの学問に取り組むことだけが必要であり、
そのためにはこれらの二つの場合において、確率
の計算の正確な、実証的な 観念を得ることで
充分である。」(MSJ p.181)(MSG p.139)(PI p.
821)

このような傾向は、そもそも『宣言』において
シュルレアリスムそのものもしくはシュルレア
リスムの実践として提示されている自動記述が『宣
言』の中においては明言されていないものの、霊

媒による自動記述と関連付けて捉えられていたこ
とから、シュルレアリスムの初期において既に見
られると指摘することができるだろう。しかしこ
のような傾向は『第二宣言』においても同様に本
格的なものとはなっていないのであって、事実ブ
ルトンは次のように書くのだ。「しかし我々はそ
れを指摘するまでにはまだなっていない。それに
この領域において、我々の能力だけを当てにする
なら、我々の側の何らかの見栄があるだろうとい
うこともかなりはつきりしている。」(MSJ p. 182)
(MSG p.140)(PI p.822)

従って『第二宣言』における倫理的段階とはい
ささか異なった傾向を持つこの隠蔽への願いも、
一気に宗教的段階を形成するものとは言えないだ
ろう。そもそもアルキエが指摘しているように、
「そして宗教ではないにしても、オカルティズム
に心をひかれ、シュルレアリスムは信仰のほとり
にいて、信仰の明確な表明は拒絶するのである。
それに信仰という言葉が何を意味するか知らない
ように思われるし、宗教や神話によって表現され
ている現実が文字通り知り得ないということをか
なりしっかりと理解しながらも、それが信じ得る
ものかどうか決めることはできないように思われ
る。」(PS p.164)

ブルトンが宗教的なものに関心を寄せるのは、
信仰の問題というよりはむしろ宗教が持つと思わ
れる超自然的な力に依存したいためであり、あく
まで倫理的段階において社会的な力に対抗すべく
観念的に設定されたものに他ならない。つまりブ
ルトンはあくまで現実に執着するわけである。こ
の点について考えていくためにコジェーヴによ
って示された宗教の概念を参考にするならば、次
のように書かれている。「人間は自らを客観化し
たいが故に、神を考案する。そして彼は世界にお
いて自らを客観化するに至らないが故に、超越的な
(下線原文)神を考案する。しかし超越的な(下

加藤 彰彦

線原文) 神との協同によって個性を実現したいと思うことは、超越的なものにおいて、つまり世界において生きる者として捉えられた自分自身と世界の彼岸(下線原文)において、それを実現することである。これは従って、この世での理想の実現を断念することである。これはそれ故、この世界において不幸(下線原文)であり、自分がそうであると知ることである。/ 言い換えるなら一方で、宗教的な感情的態度は世界において自己実現の不可能という体験から引き起こされた苦痛の感情から生まれる。これはもう一方で、この感情を生み出し育てる。そして 実際のところ 宗教的意識の不幸の彼岸における投影にすぎない個人的な神、意識的(下線原文) 現実の心象を位置させながら、超越の枠を神学的な内容で満たすのは、彼岸に自分の影を落とすこの愛惜の念なのである。/ 従って愛惜の念、人が生きている現実の満たされない苦しさの感情を抱き、究めることは、宗教的、更にはキリスト教的態度の中にあるということである。逆に、この態度の中に身を置くということは、不幸と愛惜の念を抱き究めるということである。」(ILH pp.204-205)

ブルトンが現実執着するのは当然のことながらシュルレアリスムの理念に基づいているからであるが、更に付け加えるならば、欲望に基づいた社会的力に打ち負かされたかの如く二律背反の負の部分を受け入れることは承服しかねる事態だからであり、また積極的な理由として恋愛の問題があるからである。ブルトンは隠蔽の問題に触れ、占星術や心霊学に依拠することについて述べながら、突如として女性の問題に言及するのである。「女性の問題は、世界において、素晴らしいともにはっきりしないところがあるものの全てである。そしてそれは、墮落していない男が革命だけではなく恋愛においても(下線原文) 立て得るはずである誓いを我々がそこに立ち帰らせるまさに

その限りにおいてである。この固執はこれまでのところ最も多くの憎悪を私にもたらしてしまったので、それだけいっそうそれを強調するわけである。そうなのだ、私は信じているし、ずっと信じてきたのだが、イデオロギー的な口実を盾にとるにせよとらないにせよ、愛を断念することは、何らかの知性に恵まれた人間が生涯を通して犯し得る償えない稀な犯罪のうちの一つである。」(MSJ p.182)(MSG p.141)(PI p.822)

そして更に愛の問題について触れながら、次のように書いている。「実際私が聞いてもらいたいと常に願ってきたのは、他の人達、そして他の人達だけなのである。かつてない程、ここにおいてシュルレアリスムの隠蔽の可能性が問題になっているのであるから、私は全ての思考の理想的隠蔽の場として愛を理解することを恐れない人々に頼るのである。」(MSJ p.183)(MSG p.142)(PI p.823)

愛をシュルレアリスムの実践の場として捉えることは、この現実から直接にということであり、その意味において宗教的であることはあり得ないのである。しかし、そこに見られる精神の在り方は、まさに「信仰」という言葉に表わされているが如く、宗教的なものである。従って逆に言うならば、ブルトンをこの現実引き留めているのは女性が存在するが故である。仮に女性の問題がブルトンにとって何ら重要性を持たないものであるならば、ブルトンはただちに宗教的段階に移行するであろう。女性がこの境界線上に位置し得るのは、確かに現実の存在ではあるのだが、一人の人間としては社会にとって例外的存在であり得るからである。つまりブルトンにとってある一人の女性は一般的存在ではなく個別的存在なのである。またある特定の女性は現実の存在であるため、ブルトンの信仰の対象になり得る。ここにおいて注目すべきは、その信仰の内容があくまでブルトン

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

個人のものであり、仮にそれが詩編として表われてきた場合、そこに存在する女性とは、まさに一般的女性として認識されるだけであるということである。つまりブルトンにとってはシュルレアリスムの実践としてのある女性との恋愛も、我々から見ればそのような特殊性は仮に個人的情報を入手しようとも消滅し、あくまで女性一般として捉えてしまうということであり、場合によっては相手方が誰であっても構わないというわけである。そしてここにおいて、女性一般という形で普遍化されることによって、ブルトンは現実を再征服するに至るわけである。この意味でブルトンは、宗教的意識を抱きつつも現実に留まり続けるわけである。

第十一章 『第三宣言』における実存の宗教的段階

題名が『シュルレアリスム第三宣言』ではなく「序論か否か」が付け加えられているということからも明らかなように、宣言文としてはいささか威勢がないものとなっている。『宣言』の希望に満ちた表現、不可能に挑戦するかのような姿勢は年月を経てそれなりの結果が出てきたためか、ほとんど消え失せている。『第三宣言』の初めの部分における現状分析は、従って次のようなものである。「シュルレアリスムでさえ、現われて二十年后に、あらゆる恩恵とあらゆる名声の代償である災難に脅かされないことはない。」(MSJ p.298) (MSG p.162) (P p.6)

また「シュルレアリスムがその名において、公然とであろうとなかろうと、企てられる全てのものを保護し得るには既に程遠い状態である。」(MSJ p.298) (MSG p.162) (P p.6)

この宣言文は、第二次大戦中に亡命先のアメリカで書かれて、ニューヨーク発行の雑誌で発表されている。シュルレアリスム運動としては、自然

消滅の時期に入ったとされている。『第三宣言』にはそれまでの宣言文には見られない散文詩的な表現も見られ、ブルトン自身の困惑も窺うことができる。もちろんブルトン自身の決意もまた十分に窺うことができるが、そこに見られるものは未知の道を一人で歩むといった姿である。まずシュルレアリスムの画家の追従者達に対する批判が示されており、それは次のようなものである。「芸術において、生命を賭して (下線原文) 企てられない大いなる探検はないということ、辿るべき道は明らかに手摺りが両脇にあるものではないということ、そしてそれぞれの芸術家達は金羊毛 (下線原文) の追求のみ繰り返さなければならないということを知らない人々」(MSJ pp.303-304) (MSG p.170) (P p.11) というわけである。

そして自らの進むべき道としては、次のように書かれている。「勝ち誇っている全ての思想は身の破滅を招く。ある主題についての一般的同意が一旦得られると、個人的抵抗が監獄の唯一の鍵であることを絶対に人間に納得させなければならない。しかしこの抵抗は、情報に通じていて (下線原文) 緻密でなければならない。より数多くの集まりの投票にそれ自体反論するつもりもないであろう集まり全体の満場一致 (下線原文) 投票には、私は本能的に反論することになるだろうが、同じ本能から、人間の最も偉大な解放を目指し、事実の試練をいまだ受けていなかった新しい全計画を持って準備している (下線原文) 人々に、私は投票するだろう。」(MSJ p.304) (MSG p.170) (P p.11)

ここにおいて見られるブルトンの立場は、最早運動の中心人物のそれではなく、他人によって展開される活動に対する批評家のそれである。運動を推進するというよりも、他人に任せてしまったといった印象さえ受ける。しかしこれは従来の複数の人達によって展開されてきたシュルレアリス

加藤 彰彦

ム運動が前提にあるからで、まずはそれを抜きにしてブルトンの意図するところを読み取らなければならない。それについてブルトンは次のように書いている。「私の最大の野心は、私の後いつまでも伝え得るその理論的観点を残しておくことだろう。」(MSJ p.304)(MSG p.170)(P p.11)

つまりシュルレアリスム運動の活動派から書齋派への転換という風に捉えることができるかもしれない。現実から一歩退いた形でのシュルレアリスムの実践である。そしてその考え方は、例えば次のような形で示されている。「全知を委ねさせる人間の肩はない。人が 神 の属性としたいと思っていたこの全知は、そのイメージで 理解していた範囲内で人間がそれを熱望するよう充分すぎるくらい命じられたのだ。この二つの駄弁と一挙に決着をつけなければならない。人間によって確立され、あるいは宣言されたものの中で、何も決定的なものや優すべからざるものとして捉えられ得るものはない。」(MSJ pp.305-306)(MSG p.172)(P p.12)

シュルレアリスム運動の問題そしてこの宣言文には出てこない女性の問題などを考え併せると、ブルトンの意識が宗教的段階に移行することは可能性としてないことはないのである。現実執着することの必要性があまり感じられなくなってくると、ブルトンを実際に留めておくものなくなるわけである。ブルトンはそもそも現実的ではない何か崇高なるものを目指す意識の傾向があり、それはある状況のもとにおいてはまさに宗教的意識となり得るものなのである。またその状況もその意味で整いつつあるわけであるが、それでもこの宣言文によってその可能性は否定されている。もっともブルトン自身、「これに関して、人が私に許してはくれないだろう神秘主義という非難の数々に気を付けることなく、私の精神をさすらわせるがままにするのを私に押し止どめるものは何

もない。」(MSJ p.306)(MSG p.173)(P p.13)と書くわけであるから、宗教的傾向が全くないと言いつけることもまたできないのである。

第十二章 『喫水部』における実存の宗教的段階

『第三宣言』とは異なり、シュルレアリスムの法王と言われたブルトンの本領発揮といった印象を与える。『宣言』においてシュルレアリスムが自動記述と同義語として捉えられていたように、言語を中心に捉え原点に戻ったように思われる。まずブルトンは宣言文の冒頭において、「シュルレアリスムが、組織された運動として、言語に基づく大規模な作戦の中で始まったことは、今日では周知の事実である。」(MSJ p.311)(MSG p.179)と書く。

そして、言語の問題へと移っていくわけであるが、「従って何が問題になっていたのか。その各要素が死海の表面に漂流物として振る舞うのをやめる言語の秘密を再び見出すこと以外の何ものでもない。そのためにはだんだん厳密には実利になるその使用から逃れることが重要であったし、それがそれらを解放し全ての力をそれらに取り戻させる唯一の手段だったのである。」(MSJ p.311)(MSG p.179)

そしてこの後、自動記述とジョイスの内的独白とが比較され、自動記述の独自性が主張されるわけであるが、このような文学上の議論は大して重要ではないであろうと思われる。つまりシュルレアリスムの文学、特に詩論については『宣言』において明確にされており、ここにおいては更に実存に深く関与した根源的な問題に触れなければならないのである。ブルトンは次のように書いているのだ。「理解されているように、例えばジョイスが抱き得たものとは全く別の計画の前にいる。その大胆さで先行の作品より優れていることを狙い、多音的、多義的などの領域でのその訴えは、

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

恣意性に絶えず立ち戻ることを前提としている文学的（下線原文）作品の推敲に観念の自由連想を奉仕させる（下線原文）ことなど最早問題にならない。シュルレアリスムにとって肝心なことは、言語の（錬金術的な意味で）第一物質を見つけていたということを確認することだったのだ。」（MSJ pp.312-313）（MSG p.181）

つまりここにおいて言語とは、何かを表現するためとか何かを伝えるためとかいった何かに次ぐ存在としての二次的なものではなく、あたかも物として作用するように機能するものなのである。だからこそブルトンは次のように書くのである。「このような操作を可能にする、そして理解できるものにさえする精神は、あらゆる時代において神秘哲学を活気付けたものに他ならず、それによれば、発話行為は全ての起源にあるが故に、このように言うためには名前が芽を出す（下線原文）ことが必要であり、そうでなければそれは偽りであるという結果になるのである。」（MSJ p.313）（MSG p.182）

それはあたかも呪文のようなものであって、言語が単なる二次的な記号ではなく、何かを動かす力を持ったものとして見出されなければならないわけである。一方でブルトンは『喫水部』において、依然として愛の問題を取り上げ続ける。例えばブルトンは次のように書いているのだ。「このような考察は、あまりにも長い間否定主義的と捉えられていた人間的なもの（下線原文）を前にしてのシュルレアリスムの態度を理解できるようにすることを目的とする。シュルレアリスムにおいて、女性は大いなる約束、守られた後も存続するそれとして愛され賞揚されてしまうだろう。彼女の上に付けられ、唯一の男性（下線原文）のためにしか価値を持たない選定の印は、魂と肉体のいわゆる二元論の不当さを明らかにするのに充分である。この段階で肉体的愛が精神的愛とともに、

一つにしかならないのは全く確実である。」（MSJ p.314）（MSG p.184）

この首尾一貫した考えは『第二宣言』におけるものと全く変わらず、この意味でブルトンは現実に執着していて、とても宗教的段階を形成しているとは言えない。この点において、言語を問題にした場合とではその姿勢に若干の違いが見られるようである。確かにアルキエが『シュルレアリスムの哲学』において、「しかしながらブルトンが幸福を見出したい、そして愛によってそれを見出したいと思っているのは、この世界からであり、それのみにおいてである。」（PS p.19）と指摘しているのは正しいと思われるが、それはあくまでこの現実において生きざるを得ないブルトンがシュルレアリスムにおいて高邁な目的を果たすためにその前提として現実における土台作りをしているということである。そしてそれが形成されれば、後は安心して高邁な目的に向かうことができるわけである。というのも、シュルレアリスムの目標というのは達成されることが困難というよりも、むしろ不可能であることを運命付けられた、もしくはブルトン自身によってそのように設定された目標であり、それのみに生きることは不安だからである。それではブルトンは現実における愛を通して何を求めているのであろうか。それは他ならぬこの現実において、他者によって承認されることなのである。コジェーヴは次のように指摘している。「人間は自らの人間的欲望、つまり他人の欲望に基づく自らの欲望を満足させるために、自分の人生を危険にさらして人間的であると確認される。ところで欲望を欲望するとは、この欲望によって欲望された価値に自分自身入れ替わりたいと思うことである。というのもこの入れ替えがなければ、人は価値を、欲望された対象を欲望するわけで、欲望それ自体ではないからである。他者の欲望を欲望するとは、従って結局のところ

加藤 彰彦

私であるもしくは私が表現している価値は、この他者によって欲望された価値であることを欲するということである。つまり私は彼が自分の価値のように私の価値を認めることを望み、私は彼が独立した価値として私を認めることを望むということである。言い換えるなら人間的、人間遺伝子的、自己意識と人間的現実を生み出す全ての欲望は、結局のところ承認の欲望の関数である。」(ILH p.14)

従って現実における恋愛によって他者の承認を得てしまえば、後は承認されることを求めなくてもよい自由な精神の戯れに従事することができるわけである。そもそもシュルレアリスムの詩が、他人によって理解されることを求めて書かれているのではないことは明らかである。それは宗教的段階を形成する神との対話ではなく、自己との対話と言うべきものである。それ故必ずしも宗教的段階を形成するものではないが、意識の在り方としては幾分共通性を持ったものとなっている。それは自己との対話といえども『宣言』において主張されているような自らの無意識に依拠することではなく、自分を越え、世界の外に目を向け、何か超越的なものに依拠しようとしているからである。この点についてコジェーヴは次のように説明するのだ。「人間は至高の価値を自分のものと主張する。しかし彼は具体的な世界において、生きる者つまり活動する者として敢えてそれを自分のものにしない。彼はこの世界(下線原文)を理想的なものとして受け入れることを敢えてしない。彼は現世の外にあるもの、彼自身の中にある純粋に精神的なものに価値を与えるのである。彼は世界(下線原文)を逃れ、社交好きな人として気を紛らすのである。そしてこの逃走において、彼は必然的に超(下線原文)人間的な神を見出し、そして彼はその神に彼が実際のところは自分自身(下線原文)に与えようと望んで

いた価値を与えるのである。」(ILH p.211)

これは、「現実の世界を受け入れることの(中略)拒否、現世の外にある理想(下線原文)の中への逃走したいという欲望」(ILH p.211)である。

つまり、ブルトンは宗教的態度を拒否しながらも、その意識の在り方はまさに宗教の根底にあるものである。従ってブルトンにとって求められているものは、いわゆる宗教によって普遍的な存在として設定されている神ではなく、あくまで自分自身にとっての神もしくは神らしき超越的存在なのである。そして自分自身とその超越的存在とを呼応させるものこそがシュルレアリスムの言語である詩なのである。あたかも呪文を唱えるかの如く、この詩によってこの世界の中における自分自身の在り方が定められるに違いない。だからこそブルトンは『喫水部』のまさに最後において、次のように書くのである。「自ら組み立てた梯子を降りにつれて、願いや苦しみをだんだん評価できなくなる他の人達に対して、人間が自分自身について知っているわずかなことを、彼を取り巻くものの認識に役立たせることができるのは、謙遜した場合だけである。そのために、彼が思いのままに使う大きな手段とは、詩的(下線原文)直観である。シュルレアリスムにおいてようやく束縛から解放されたそれは、それが既知のあらゆる形式に同化することだけではなく、大胆にも新しい形式を創造する。つまり表明されていようといまいと、世界のあらゆる構造を理解できる立場にあることを望むのである。そのみが、我々に永遠の神秘の中で目に見えないよう目に見える超感覚的实在の認識としてのグノーシス(靈知)の道に立ち戻る繋がりを供給するのである。」(MSJ p.317)(MSG pp.187-188)

グノーシスの道とはまさに人間の救済をもたらすものであり、ここにおいてシュルレアリスムは宗教的段階を形成すると考えることができるであ

ろう。

終章

自由とは本来現実には様々な選択肢があって、自分の考えや好みに応じてどれでも選ぶことができる状態のことである。もちろんここでは、他者を侵害するなどのことは除外されるべきである。またそれが経済活動に類するような事柄に及ぶと、いわゆる需要と供給の関係もあり、理念として決して悪くはないが、現実的には選択できないということも生じてくるだろう。確かに自由ということになれば、混乱も生じ、社会的秩序も維持されないということも起こり得るわけであるが、もし必要ならば、社会的秩序が維持される限りにおいてという条件があっても何ら問題はない。いずれにせよ、自由ということで生じる社会的不利益は脇に置くとして、そのような条件下において現実には様々な選択肢が用意されているかということ、必ずしもそうではない。様々な人がいて、考え方や感じ方が多様化している現実において、全員の要望に応えることは本来的に不可能であるということも充分考えられるわけであるが、逆に社会的秩序にとっては好ましくない選択肢が現実には用意されているという実に奇妙な事態がまず前提としてある。このような現実において自分にとって選択すべき選択肢が用意されていないということになると、どのように対応すればいいか。まず考えられるのは、現実における形而下的次元から形而上的次元に移行して対応するということである。それは困難な事態に直面した場合、一時的にせよ立ち止まって、様々な反省や熟慮を重ねるということも含まれるであろうが、半ば現実を拒否し、想像の世界に向かうということである。このあたりの経緯については『宣言』において、次のように書かれている。「親愛なる想像力よ、私が君の中でとりわけ好きなのは、君が容赦しないという

ことだ。自由という言葉だけが、私を今尚高揚させる全てである。私はそれを古くからある人間の熱狂を際限なく維持するのにふさわしいと信じている。それは恐らく私の唯一の正当な熱望に応えるのである。我々が受け継いでいるとても多くの不幸の中であって、精神の最大の自由（下線原文）が我々に残されていることはしっかりと認めなければならない。」(MSJ p.16)(MSG pp.12-13)(PI p.312)

しかし現実はこの想像力を自由に働かせるのを阻害する方向で存在している。例えばそれは論理の支配である。シュルレアリスムは何も論理自体を否定しているわけではなく、論理で行き着くところまで行って、更にその先にある論理では対応できない領域において戯れるわけである。しかし現実にある論理とは、デリダが批判するように、根拠なくある種の価値を標榜するために作り上げられたものであり、解体されることを求めるものである。ブルトン自身『第二宣言』で指摘しているように、想像力を働かせつつも、その中に現実の痕跡を残す言葉が入り込むと、まさに「今の生活（下線原文）」(MSJ p.134)(MSG p.78)(PI p.782)が侵入してくるのである。

もちろんこのようなことは当初から予想されていたことであるし、あくまで想像力自体の問題であるとも言えるだろう。しかし現実の問題として想像力だけでは対応できないこともまた事実である。例えば『第二宣言』が書かれた時期においては、シュルレアリスム運動の内部において様々な問題があり、『第二宣言』の中ではかなり強烈な批判が展開されている。確かにこのような問題もシュルレアリスムを実践していく上で試練であると捉えることもできるのであるが、それならシュルレアリスムを実践していく上で用意されている手段は恐らく想像力のみには留まるものではないであろうと予測することができる。ブルトンが『宣

加藤 彰彦

言』において次のように書く時、つまり「私は、他の領域と同様にこの領域においても、他の全ての人達の相次ぐ失敗を知らされても、自分を負けたものと思わず、望むところから出発し、道理にかなった（下線原文）道とは全く別の道を通って行けるところまで到達する人間の純粋なシュルレアリスムの喜びを信じている。」（MSJ p.54）（MSG p.63）（PI p.345）と書く時、また『第二宣言』においても同様に、「我々は、我々が指し示し辿って行くのを助けることができる 存在している道を通して、存在していない と人が主張していたものに到達することを表明する。」（MSJ p.137）（MSG p.82）（PI p.785）と書く時、それは何をもってしてのことなのかを我々は問わなければならない。

もちろんそれをシュルレアリスム的な作品という文学・芸術の領域に限るとするなら、話は簡単である。しかしシュルレアリスム運動として捉えた場合、領域はまさにこの現実を含んでいるわけであり、それを文学的芸術的に処理するということは考えられないであろう。もっともブルトンは『宣言』において「はるかに重要であると私に思われるのは、私は十分にそれを理解する機会を与えたのだが、シュルレアリスムの行動への適用である。」（MSJ p.52）（MSG pp.60-61）（PI p.344）と書いているわけであるから、行動原理は文学・芸術の領域におけるものと同様と考えても差し支えないかもしれない。

恐らくその行動というのが、シュルレアリスムの作品を発表して世間の意識を変えていくといった類いのものであると思われるが、それは注において次のように書かれているからでもある。つまり、「ある本の出版について真実であることは、シュルレアリスムの方法が何らかの恩恵を享受し始めるであろう日には、他の数多くの行為についてもそうなるであろう。その時にはまさしく、新

しい道徳が我々の全ての悪の原因である流通している道徳と入れ替わらなければならないだろう。」（MSJ p.53）（MSG p.60）（PI p.344）

このシュルレアリスムを推し進めるものが、まず『宣言』の中に見られるシュルレアリスムの定義から導き出すと、そこには明言されていないものの、『ナジャ』において同様の趣旨が示されている部分から推察するに、無意識であると思われる。そしてまたフランス現代思想の特にラカンの用語で置き換えるならば、それはまさに欲望なのである。欲望をただひたすら発揮し続けること、これが現実において対応し得る一つの力となることは考えられるかもしれない。確かにコジェーヴは「人間の実在は 本質的に欲望であり、欲望に応じた活動である。」（ILH p.15）と書いている。

ところがコジェーヴは次のようにも指摘する。「彼はせいぜい与えられた世界を 改革する、つまりその細部を変更し、本質的な特性は修正することなく個々の変換をしようとするだろう。この人間は 巧みな 改良主義者、更には順応主義者として行動するであろうが、本当の革命家としては決して行動しないだろう。（中略）従って、彼を解放し それ故 彼を満足させ得るのは、改革ではなく、世界の 弁証法的、更には革命的排除である。ところで、世界の革命的変換は、全体として見て与えられた世界の 否定、非承諾も前提とする。」（ILH p.33）

ここまで来ると、著しく極端な手段しか考えられないわけであるが、言語を対象としてシュルレアリスムを展開してきたブルトンにとって、現実に対抗し得る力は言葉に求められなければならない。しかしそれは俗に言う言論の力といったものであろうか。確かにそれもあると思われるが、ブルトンにとっての言葉はもっと直接的なものではないかと考えられる。例えば『宣言』において、ブルトンは次のように書いている。「詩的に言え

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

ば、それらはとりわけ即時の不条理（下線原文）の非常に高い度合によって真価を発揮するのであり、この不条理の特性は、より深く検討すれば、世界で容認でき正当である全てのものに譲歩するということ、つまり要するに他のものと比べて客観的でなくもないいくつかの言葉の的確さや事実の暴露である。」(MSJ p.34)(MSG p.35)(PI p.327)

つまりこの世界この現実においては、存在のあるべき姿というものがあるのだ。そこに価値を見出すのではなく、アリストテレス風にあるものはある、ないものはないといった至極単純なものである。しかし社会が形成され、そこに欲望が入り込み、社会を成立させるに至ると、あるものはある、ないものはないと言っていられなくなる。あるものはない、ないものはあるといった矛盾を受け入れる状況が出来るわけである。これは我々の意識の在り方とも関係してきて、サルトル風に言うなら、我々は自分の意識の存在を確かなものとし、他者の意識の存在については、見ることができないなどの理由によって、それを確かなものとはできないし認識することができない。従って我々にとって自分の意識は存在するが、他者の意識は存在しないということになる。しかし我々にとって意識というものは常に何かについての意識であるため、その前提となるべき何かが存在しなければ、意識も存在し得ないわけである。従って他者の意識は対象となる限りにおいて存在し得るが、対象を失えば自分の意識はなきに等しいわけである。このように考えるならば、我々の意識が欲望に基づいてある存在を求めると、本来それが存在していないものではあっても、社会的にそれは存在するとなってしまうのである。もちろんそれが可能となるためには、ないものをあると追認する他者が存在しなければならない。そしてその追認は追認する者の欲望によって可能とな

る。もっともこのような事態において、正しい言説を展開して終わりというわけにはいかないであろう。というのも言葉とはここにおいて手段であり、問題とすべきは欲望の方だからである。しかし欲望は否定することはできない。現実的には別の欲望もしくは欲望の対象となるものを持って来ることによって対応し得るかもしれないとは考えられる。それでも欲望それ自体は否定することはできない。欲望を否定することは、その存在自体を否定することだからである。従って残された道は、この現実における存在についてあるがままを表現することによって、それはまさに存在するものに対しての表現であるため、何らかの呼応関係があると考えられることから、その呼応関係を探ることである。そもそも言葉とは何らかの存在に対する代理物であり、ソシュールが指摘するように本来的にはその言葉がそれである理由は全くなく、その意味で恣意的なものにすぎないわけであるが、一度それとして代理関係が確立されればその言葉はそれとして機能し得るのである。そしてただの代理物にすぎない言葉が我々の精神を形成するという事態が現にあるわけであるから、言葉がただの記号に留まることなく、何かを呼び覚ますことは可能であろうと思われる。ブルトンは、『宣言』において、「確かに私はシュルレアリスム的な言葉の予言の効能を信じているわけではない。」(MSJ p.53)(MSG p.61)(PI p.344)と書いている。

確かに自らの運命をそこに見出すということについては無理があるだろうが、この部分に関連して付されている注は興味深いものである。「今日1924年6月8日、1時頃、その声は私にささやいていた、ベチューヌ、ベチューヌと。それはどういう意味だったのか。私はベチューヌを知らないし、フランスの地図のこの地点の位置をわずかにしか思いつかないし、ベチューヌは私にとっ

加藤 彰彦

て何も、『三銃士』の一場面すら思い起こさせない。私はベチューヌに向けて出発すべきだったのだろう、そこでは恐らく何かが私を待っていたのだ。それは本当にあまりにも簡単なことだったのだろう。チェスタートンのある本の中では、ある街の中で探している誰かを見つけるために、外から少しでも異常な細部を見せている家々をことごとく訪問して満足している探偵が問題になっていると、人が私に話してくれた。この方式でもやってみる価値はあるだろう。」(MSJ p.53)(MSG p.61)(PI p.344)

ブルトンにとってシュルレアリスムの中心的手段はまさに言語なのであり、それを媒介にして、この世界この現実のあるべき存在と呼応関係が成立すると考えるわけである。この場合はあたかも超現実的な声といった趣きではあるのだが、ブルトンの側から発せられた言葉が、詩という形態であれ何であれ、この世界この現実の存在とボードレールの「呼応」にも見られるような呼応関係が成立することによって、その存在が持つ力、それはこの世の摂理と言うことも可能であると思われるが、その力を手に入れることができるのではないかということである。そもそも我々は存在することから出発しているわけであり、そこから様々な問題が生じていることを考えるなら、我々はその存在の有りに従うしかないわけである。もちろんその存在についてその根源にあるものは、そもそも我々の側にはなく、超越的存在の側にあるわけであるから、我々はそれに対して言葉でもって関わっていくしかないわけである。それは恐らく我々の即自存在をもってしては、そのような存在を感じ取ることはそもそも不可能ではあるのだが、意識の在り方によってはかろうじて把握することが可能だからである。そして言葉も恐らくは書かれたものであるよりは口頭により発せられたものの方が、より物に近付くという意味で好まし

いかかもしれない。このような試みは、およそ不可能に近いとも思われるが、ここまで対象と手段が明確になるならば、後はただひたすら頑張るしかないわけである。このように考えるならば、『宣言』においてブルトンが次のように書いていることも理解されるだろう。「とにかく一つの矢印が今これらの地方の方向を指し示して、本当の目的の達成は最早旅人の忍耐力次第でしかないのは事実である。」(MSJ p.29)(MSG p.29)(PI p.323)

[注]

各引用文の後にある括弧の中の略記号は、以下の文献を示している。頁数は引用箇所である。尚引用文は全て筆者による訳出である。

- (MSJ) André BRETON, *Manifestes du surréalisme édition complète*, Jean-Jacques Pauvert, 1972
- (MSG) André BRETON, *Manifestes du surréalisme*, Gallimard, idées, 1977
- (PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1988
Manifeste du surréalisme, 1924, pp.309-346
Second manifeste du surréalisme, 1930, pp.775-828
Nadja, 1928, pp.643-753
- (P) André BRETON, *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1999
Prolégomènes à un troisième manifeste du surréalisme, 1942, pp.3-15
Entretiens 1913-1952, 1952, pp.423-649
- (PS) Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, champ philosophique, 1977
- (ILH) Alexandre KOJÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, collection tel, 1947
- (CA) Marcel HÉNAFF, *Claude Lévi-Strauss et l'anthropologie structurale*, Belfond, AGORA, 1991
- (MC) Michel FOUCAULT, *Les mots et les choses*, Gallimard, Bibliothèque des sciences humaines, 1966
- (EN) Jean-Paul SARTRE, *L'être et le néant*

アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言集」の弁証法的読解

Essai d'ontologie phénoménologique, Gallimard,
Bibliothèque des idées, 1943

(キ学)『キルケゴールを学ぶ人のために』大屋憲一
細谷昌志編、世界思想社、1996

尚、本文でも触れておいたが、「シュルレアリスム宣言集」の引用に関しては、ジャン＝ジャック・ボヴェール版を基本にし、引用箇所も第一に記した。しかし、この版は現在入手し難く、筆者自身以前にパリで古書として購入した経緯があるため、参照する便宜を考え、ガリマールから出ていて入手しやすいポケット版も引用箇所を併記しておいた。これについては、ジャン＝ジャック・ボヴェール版と全く同一というわけにはいかず、例えば『溶ける魚』は収録されていない。これは散文詩をまとめて収録している他のポケット版で読むことができるが、本論考における宣言文という理論的箇所についてはポケット版でも問題はない。また、『喫水部におけるシュルレアリスムについて』はプレイアード版にはまだ収録されていないのであるが、プレイアード版は基本として考えられるため、他の宣言文についてはこれも引用箇所を併記しておいた。

キルケゴールについては、入手できるもので理解を深めたが、本論考の目的としている実存の三段階についてまとめて考察しているもの、それも一歩退いた形で客観的に考察しているものは少ないように思われ、結局のところ概説書に依存することとなった。T.W.アドルノ『キルケゴール 美的なものの構築』(みすず書房)も期待して読んだが、本論考の観点からすればあまり参考にはならなかった。翻訳書ではあるが、参考になると思われるものを挙げれば以下の通りである。

O・コーリー『キルケゴール』白水社、1995

E・ガイスマー『キルケゴールの宗教思想』

東海大学出版界、1978

R・トムティー『キルケゴールの宗教哲学』

法律文化社、1987

本論考においては、ヘーゲルの弁証法に留まることなく、クロード・レヴィ＝ストロースの弁証法、その一つとして「料理の三角形」についての考察を行なっている。これに関連して、フランスに赴き資料の全般にわたる調査を試みたが、意外にもまとめて書かれたものはなく、むしろ今回引用もした研究書の方が有益であった。尚、レヴィ＝ストロースの著作で参考になると思われるもの

を以下に挙げておく。

Anthropologie structurale, Plon, 1958

Le cuit et le cru (MYTHOLOGIQUES I), Plon, 1964

L'Homme nu (MYTHOLOGIQUES IV), Plon, 1971

特に二番目の著作は、表題から極めて本論考の趣旨に合致しているように思われたが、むしろ歌に関する考察の方が主であり期待通りではなかった。

カントの実践哲学における「真実を話す義務」と「嘘をつく権利」についての議論は、倫理的であることを考える上において避けて通ることのできないものであるが、私見の一端は本文に示した通りであり、極めて常識的範囲に属していると思われるが、更なる考察のためにカントの見解の該当箇所を記しておく。

イマヌエル・カント「人間愛からの嘘」(人間愛から嘘をつく権利と称されるものについて)『カント全集 13』岩波書店、2002

デリダの西洋形而上学批判、脱構築については既に他の論考において言及しているので、ここで改めて言及することは避けるが、本論考において参照すべき著作は以下の通りである。

L'écriture et la différence, Le Seuil, 1967

De la grammatologie, Minuit, 1967

Positions, Minuit, 1972

本論考における弁証法という視点は主としてヘーゲルからのものであるが、これは我々が試みに一つの読解として提示したのではなく、あくまで出発点はブルトン自身のヘーゲルに対する関心の強さから来ている。以下、ブルトンのヘーゲルに対する見解を提示しておく。

「今日では人々は、全てのものがその反対のものに沈殿する、そして二つとも唯一の範疇に溶解する、つまり唯一の範疇とはそれ自体最初の項と両立して、このように精神が絶対的観念に到達するということまで続くという、全ての対立を両立させ、全ての範疇を統一するという思想を手に入れている。」(PI p.262)

「いかなる専門家も、ヘーゲルに関する注釈ということでは私に教えることはないだろうが、私がヘーゲルを知って以来、更に私の哲学の教師であり、実証主義者であるアンドレ・クレッソンが、1912年頃、絶えず口にしていた皮肉を通して、ヘーゲルのことを気にして以来、私が彼の考え方を吸収したということ、そして私にとって彼の方法は他の全てを貧弱なものにしてしまったとい

加藤 彰彦

うことは、それでも尚真実である。ヘーゲルの弁証法が機能していないところでは、私にとって思想もなければ真理への希望も存在しない。」(P p.525)

これについては『シュルレアリスムの哲学』を書いたアルキエも同様の見解を示していて、それは次のようなものである。

「確かにブルトン、幾度もヘーゲルに対する賛美を明言した。そして恐らく、弁証法的な総合や矛盾したものの同一性に関するヘーゲルの公式の多くは、彼の心を捕らえることができたし、彼にとって彼自身の詩的要請を表現しているように見える。」(PS p.41)

この矛盾解消の弁証法であるが、これを対象に認めるか、あるいはそのように捉えることができる主観の側の問題とするかによって、更に議論は分かれるだろう。これは超現実をそのような実体を持ったものとして捉えるか、あくまで意識の問題とするかと同様に考えられるものである。この問題はシュルレアリスムについて見られる唯物論と観念論の対立とも関わってくる。レヴィ＝ストロースにおけるように、文化が介在することで更なる発展が現実に見られるという方が明快であり知の力を感じさせ痛快であろうが、宣言集を通して考えるなら、意識の側の問題として捉えざるを得ないと思われる。それは例えば『第二宣言』の次のような箇所から考えることができる。

「あらゆる点から見て、生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能と伝達不可能、高い所と低い所が、そこからは相対立して感じ取られることをやめる精神のある一点が存在すると考えざるを得ない。」(PI p.781)

欲望の問題についてはヘーゲル＝コジエーヴからの説明をしたが、この点についてはジャック・ラカンの欲望の維持と継続の説を筆者としては支持している。これについては既に他の論考において言及しているので、ここでは参考文献として次のものを挙げておきたい。

Écrits, Le Seuil, 1966